「学生による授業評価」に基づく

授業報告書

2022 年度

聖心女子大学

目次

第 1 章　学生による授業評価の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

第 2 章　専任教員による授業報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　17

第 3 章　学科・専攻による授業報告書

英語文化コミュニケーション学科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　56

日本語日本文学科 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　58

史学科 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　60

人間関係学科 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　61

国際交流学科 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　64

哲学科 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　65

教育学科［教育学専攻・初等教育学専攻］・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　67

心理学科 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　70

第 4 章　聖心女子大学グッドティーチャー賞の推薦・・・・・・・・・・・・・・・・・　72

参考資料　2022 年度 専任教員授業報告書（回答フォーム）

第１章　学生による授業評価の概要

１．実施対象科目

2022 年度の学生による授業評価は、2021 年度に続き、Google フォームを用いたオンライン回答形式に変更した。

2022 年度に授業評価が行われたのは 386 科目であった。内訳は専任教員による授業が 110 科目（前期 55 科目、後期 43 科目、通年 12 科目）で、非常勤による授業が 270 科目（前期 130 科目、後期 105 科目、通年 35 科目）であった。学生の有効回答者数は延べ 8,023 名となるが、実施科目のうち、教員の指示なく回答したと思われる科目については集計の対象外とした。

コロナ禍前の 2019 年度は全体で 475 科目行われたのに対し、2021 年度は 241 科目と半減したが、2022 年度は 380 科目と数字は改善されてきた。ただし、専任教員による授業評価数は 2019 年度の 78 科目から、2021 年度は 93 科目に増加、2022 年度はさらに 110 科目と、オンラインで実施したことの効果があがっている。非常勤の授業評価実施数も 2021 年度の 148 科目から、2022 年度は 270 科目へと大きく改善している。ただし、オンライン回答以前の 2019 年度は 475 科目であったことを考えると、非常勤の授業評価実施数は十分に戻っていない。

２．実施方法

調査は Google フォームで実施した。学生は教員の指示に従い、各自 Google にアクセスして回答する。回答は無記名で、時間は 10 分～15 分程度であった。

（１）専任教員実施方法

実施予定の科目を選択式・自由記述式のどちらで実施するかを学生に指示し、回答率向上のためできるだけ授業時間内に回答するよう周知する。授業時間内に実施が難しい場合は「明日の 17 時まで」など期日を指定して対応する。いずれの方式も教務課で集計を行い、選択方式で実施の場合はデータと自由記述部分、自由記述方式で実施の場合は記述部分を教務課より受け取り、自身で管理し年度末に授業報告書を作成する。リアクションペーパー・教員個人で作成したアンケートなどで実施の場合は、教員自身で準備をする。

報告書の提出については 2 科目以上実施科目がある場合は、1 科目の提出でも構わないことになっている。尚、本年度の報告書提出数は 81 科目であったが、内 1 科目が旧書式での提出だったため、グラフ作成時のデータの集計外とした。記載されている内容はあてはまる項目に分けて記載している。

（２）非常勤講師実施方法

実施予定科目を選択式で実施（※非常勤は選択式のみ）することを学生に指示し、回答率向上のためできるだけ授業時間内に回答するよう周知する。授業時間内に実施が難しい場合は「明日の 17 時まで」など期日を指定して対応する。教務課で集計を行い、調査結果データ及び自由記述部分は後日郵送する。

（３）前年度からの変更点などについて

2021 度は Sophie（教務管理システム）を用いて専任教員と非常勤講師に分けて実施について周知したが、回答数が増えず、全体で 241 科目、6,273 名の有効回答数であった。そこで、2022 年度は実施についての告知を Sophie に掲示するだけでなく、研究室を通じて紙媒体で配付した。また、前年同様、専任の先生には学内メールを送信、非常勤の先生には Sophie に「メールあり」で調査期間中 2 度ほど Sophie に実施について掲示した。そのためか、上記記載の通り専任教員による選択式フォームでの実施授業が 110 科目（前期 55 科目、後期 43 科目、通年 12 科目）、非常勤講師による選択式フォームでの実施授業が 270 科目（前期 130 科目、後期 105 科目、通年 35 科目）となり、授業評価実施数が全体で 380 科目と増え、学生の有効回答者数は延べ 8,023 名と 1,700 名ほど増加した。また、実施についての告知に、学生が記入する回答フォームの QR コードを後期から記載し、これをそのまま授業時間内に学生に提示するよう求めたことも、有効であったと考えられる。

３．評価内容

質問内容は以下の通りである。

Q1. この授業への出席率はどのくらいでしたか。

Q2. この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。（本やインターネットで調べるなども含む）

Q3. 受講前からこの授業の内容に興味・関心があった。

Q4. 総合的にみて、この授業に満足した。

Q5. シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。

Q6. 教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった。

Q7. 授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った。

Q8. 毎回の授業内容の分量や速度は適切だった。

Q9. 教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった。

Q1 については、「すべて出席した、1～2 度欠席したがほとんど出席した、３分の 2 程度出席した、３分の１程度出席した、ほとんど出席しなかった」の 5 段階で、Q2 については「２時間以上、1～２時間、30 分～１時間、30 分以下、０分」の 5 段階で回答を求めた。その他の質問については、「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの 5 段階で評価してもらった

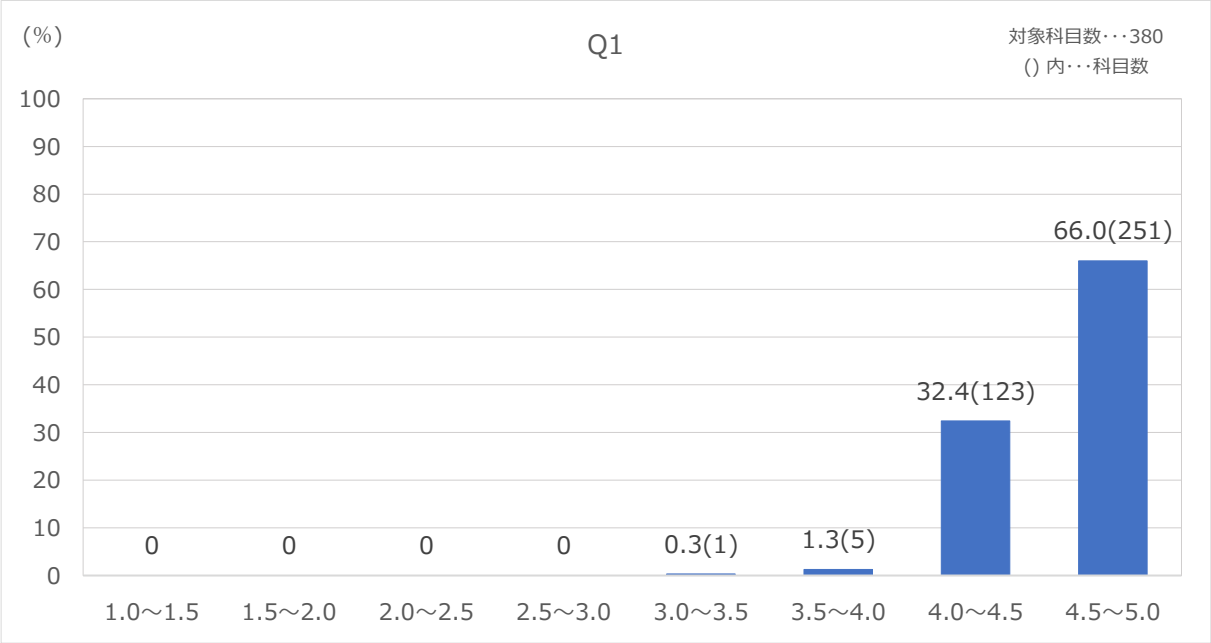
４．各設問への回答内容

各授業について学生の回答の平均値を算出し、その平均値の分布を以下の図で示している。以下、順に見ていくが、出席状況やその他の授業に関連する満足度は高めであり、2021 年度に比べて大きな変化は見られなかった。

前回の 2021 年度ではコロナ前の 2019 年度と比べ、予習・復習時間、出席率、授業への満足度ともに大きく改善が認められた。その理由として、授業評価の数が減少し回答した学生数が減ったことなどから、全体に良質な授業が数字に反映されやすかったのではないかと推測されたが、2022 年度は授業評価の実施数、回答した学生数も大幅に伸びたにもかかわらず、数値的には 2021 年度の水準を保っていた。コロナ過を経て、教員の授業改善や学生の受講態度が向上したという推測も成り立つが、今後の推移にも注目していきたい。

（１）この授業への出席率はどのくらいでしたか

出席の回答の平均が 4.5 以上、すなわち学生の平均が「1～2 回の欠席」か「すべて出席した」である授業が全授業の 7 割弱を占め良好である。ただし、2021 年度ではこの数値が 9 割であったのに比べるとやや低下が認められる。コロナの影響が緩和されたことにより、学業以外の活動が活性化したことも一つの理由と考えられる。



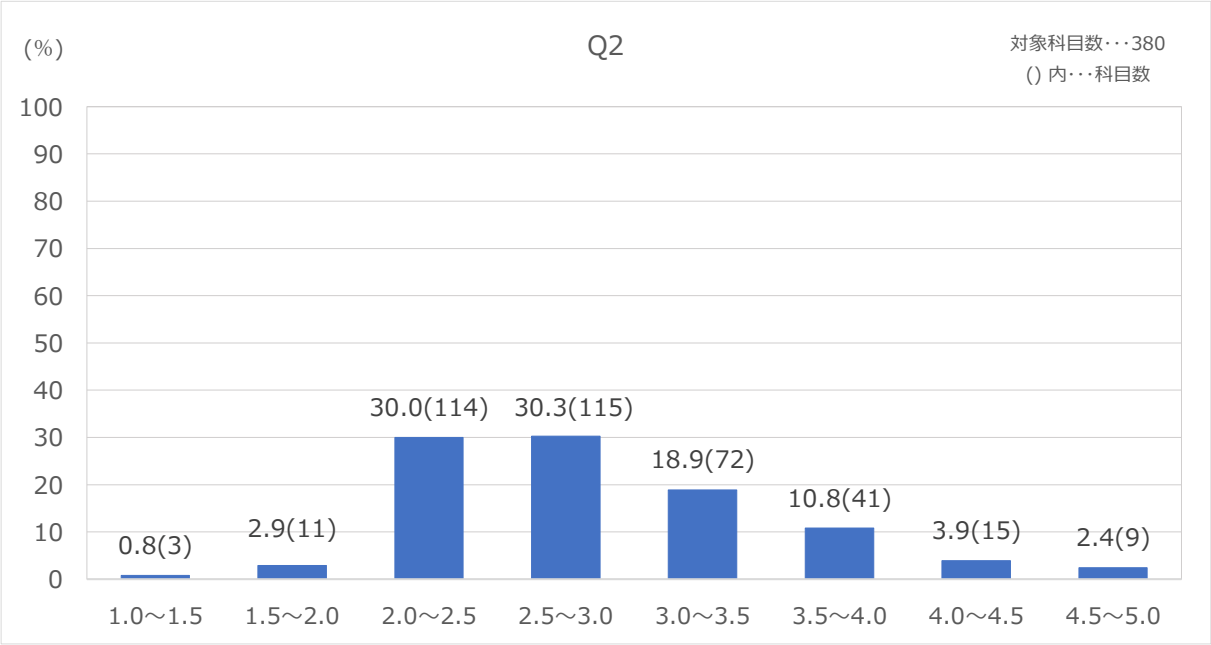
Q1. この授業への出席率はどのくらいでしたか。

5. すべて出席した　　4. 1～2 度欠席したがほとんど出席した　　3. ３分の２程度出席した

2. ３分の１程度出席した　　1. ほとんど出席しなかった

（２）この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。（本やインターネットで調べるなども含む）

回答の状況から学生が「週 30 分以下」から「30 分～1 時間」程度の予習、復習をした授業が中心となる分布であったが、2021 年度に比べると平均値が 2.0～2.5 の授業が全体に増え、予習・復習時間が若干であるが減少している様子がうかがえる。対面授業が増え、オンラインにて授業後の課題を求める授業が減少したためとも考えられる。



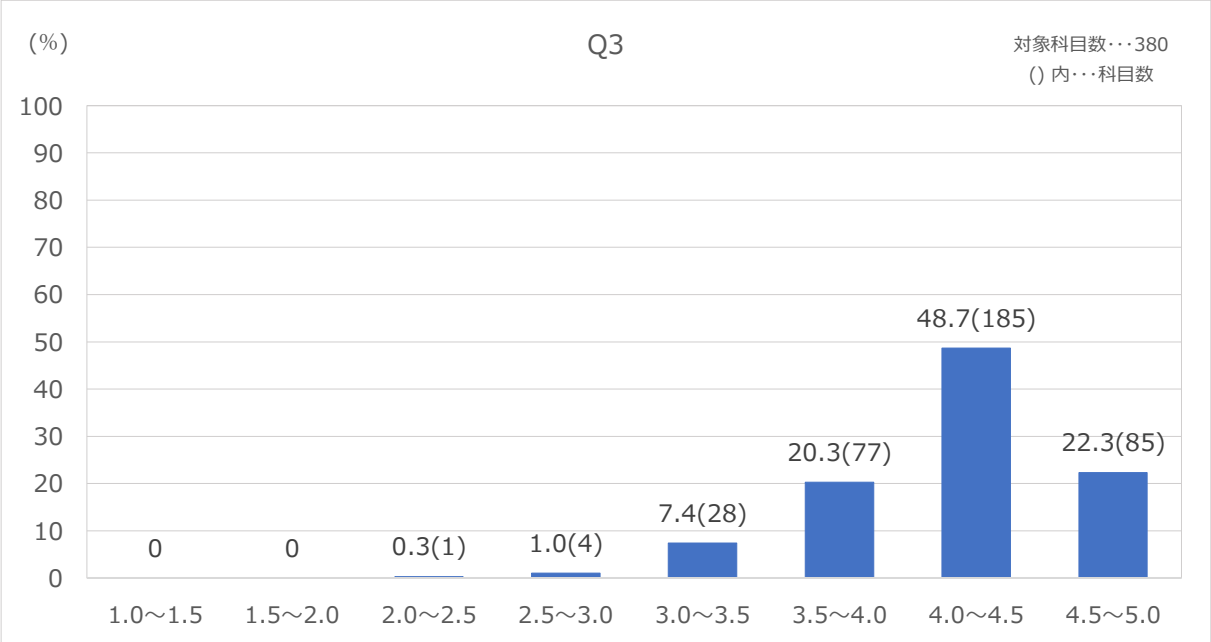
Q2. この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。(本やインターネットで調べるなども含む)

5. 週 2 時間以上　　4. 週 1～ 2 時間　　3. 週 30 分～ 1 時間　　2. 週 30 分以下

1. 週 0 分

（3）受講前からこの授業の内容に興味・関心があった

「受講前からこの授業の内容に興味・関心があった」という項目に当該授業がどの程度あてはまるかを尋ね、受講前の授業への学生の関心度とした。平均が 4.0 以上、すなわち、「ある程度当てはまる」から「よく当てはまる」と評価された授業が全体の 7 割強と多かった。2021 年度との違いは見られない。



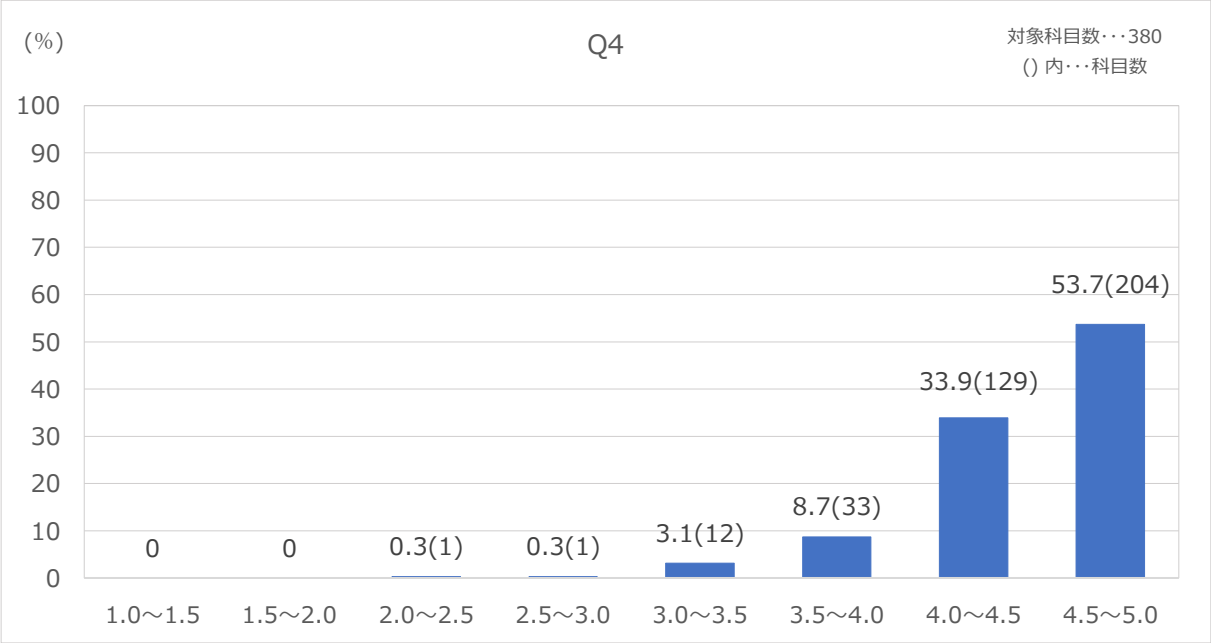
Q3. 受講前からこの授業の内容に興味・関心があった。

5. よくあてはまる　4. ある程度あてはまる　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　1. まったくあてはまらない

（4）総合的にみて、この授業に満足した。

「総合的にみて、この授業に満足した」との項目に当てはまる程度を尋ね、授業への満足度とした。学生の評定の平均が 4.0 以上、すなわち、「よくあてはまる」と「ある程度あてはまる」の間に学生の平均がある授業が 9 割を超えて多かった。2021 年度と比較しても大きな変化は認められない。



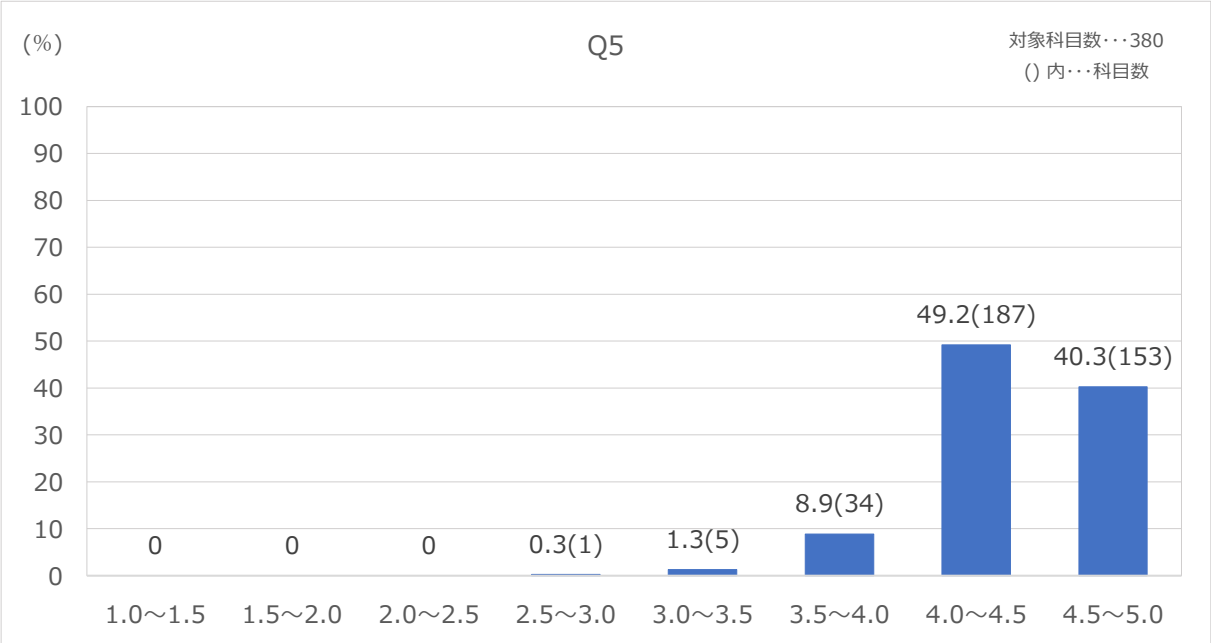
Q4. 総合的にみて、この授業に満足した。

5. よくあてはまる　4. ある程度あてはまる　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　1. まったくあてはまらない

（5）シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。

「シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った」の項目への当てはまる程度を尋ね、シラバスの記載内容への評価とした。学生の評価が、4.0 以上、つまり「ある程度当てはまる」以上と評価された授業が全体の 9 割強と多く、2021 年度の水準を保っている。



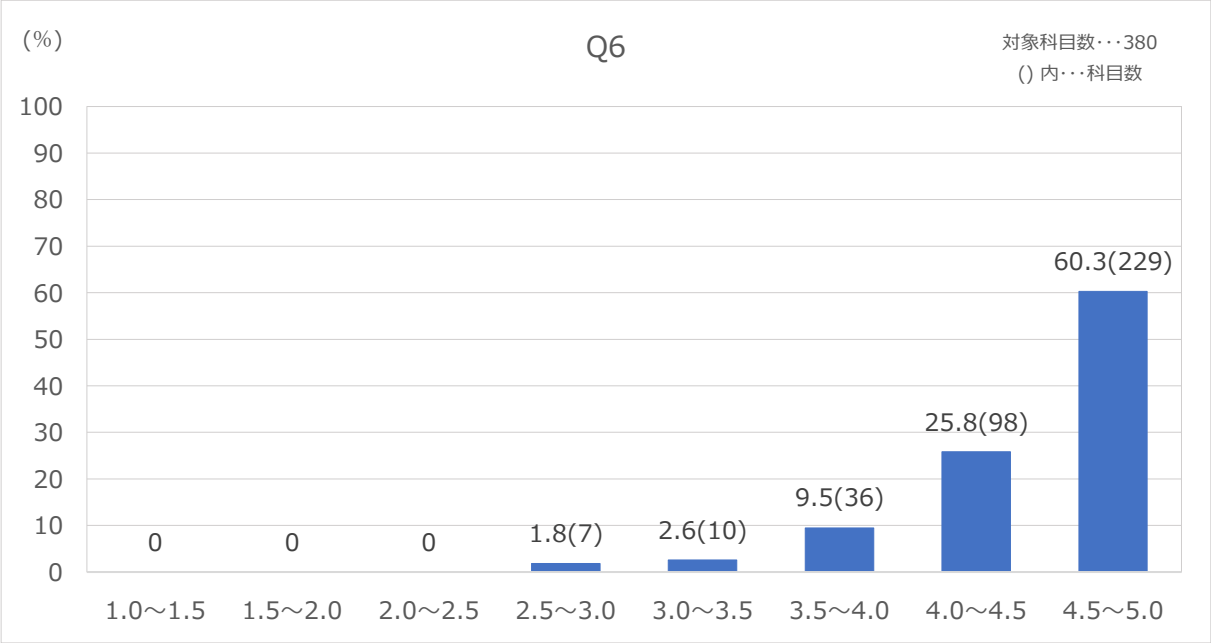
Q5. シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。

5. よくあてはまい　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない

（６）教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった

「教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった」の項目への当てはまる程度を尋ね、教員の説明への評価とした。学生の平均の評価値が「4.5～５」の授業が全体の６割を占め、全体に評価の高い授業が多かった。2021 年度に比べると、上記の比率が 10 ポイントほど低下している点がやや気になる。



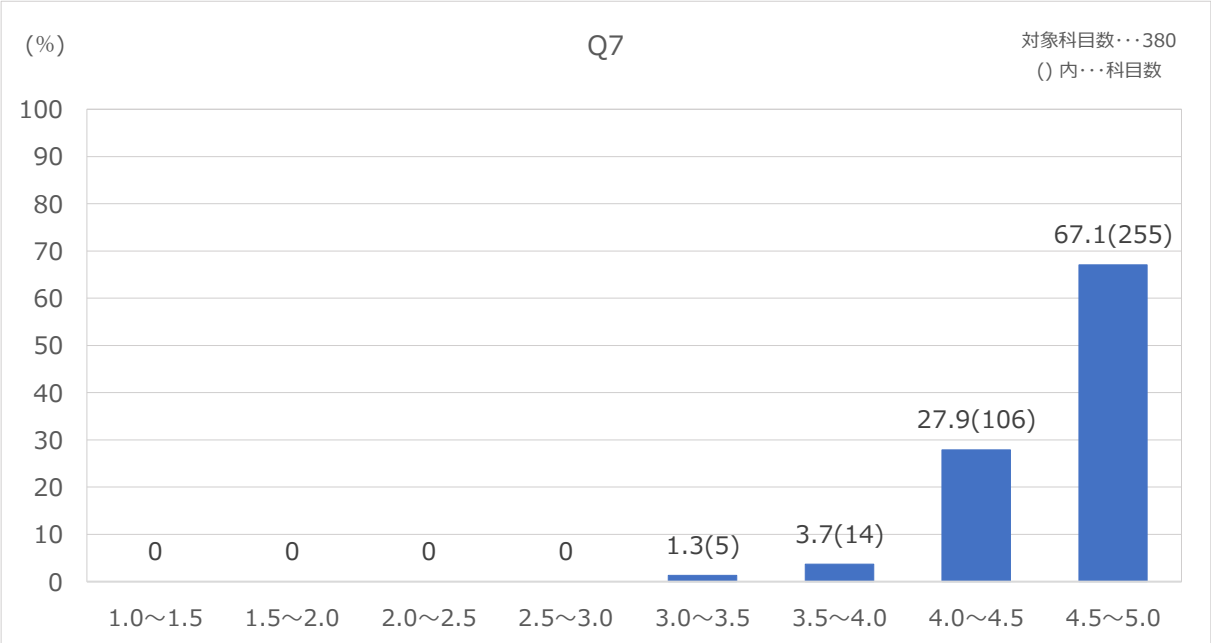
Q6. 教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった。

5. よくあてはまる　4. ある程度あてはまる　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　1. まったくあてはまらない

（７）授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った

「授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った」の項目にあてはまる程度を尋ねた。学生の平均値が 4.5 以上の授業が全体の 7 割と多かった。これも 2021 年度から大きな変化は見られない。



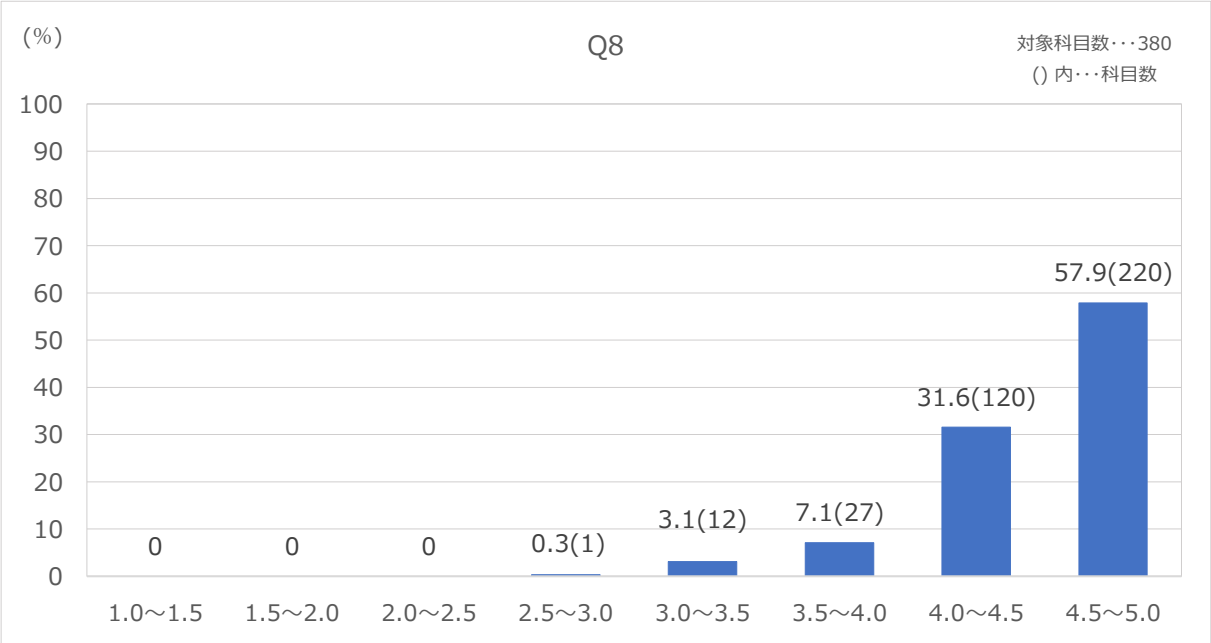
Q7. 授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った。

5. よくあてはまる　4. ある程度あてはまる　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　1. まったくあてはまらない

（８）毎回の授業内容の分量や速度は適切だった

「毎回の授業内容の分量や速度は適切だった」の項目に当てはまる程度を尋ねたところ、平均値が 4.5 以上、「ある程度当てはまる」から「当てはまる」と評価された授業が、全体の 6 割弱であり、平均値で 4 以上の授業が 9 割を占めている。2021 年度との変化は見られない。



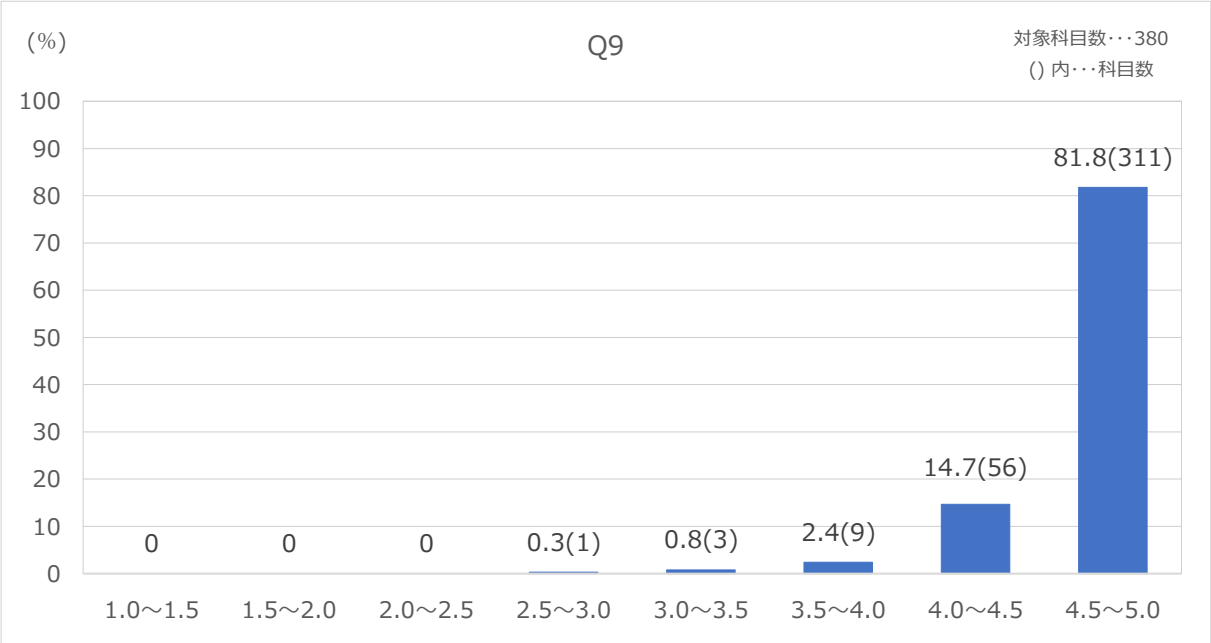
Q8. 毎回の授業内容の分量や速度は適切だった。

5. よくあてはまる　4. ある程度あてはまる　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　1. まったくあてはまらない

（９）教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった

「教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった」に当てはまる程度は平均評定値が 4.5 から 5 と高い授業が全体の 86%を占めて多かった。2021 年度と同水準を保っている。



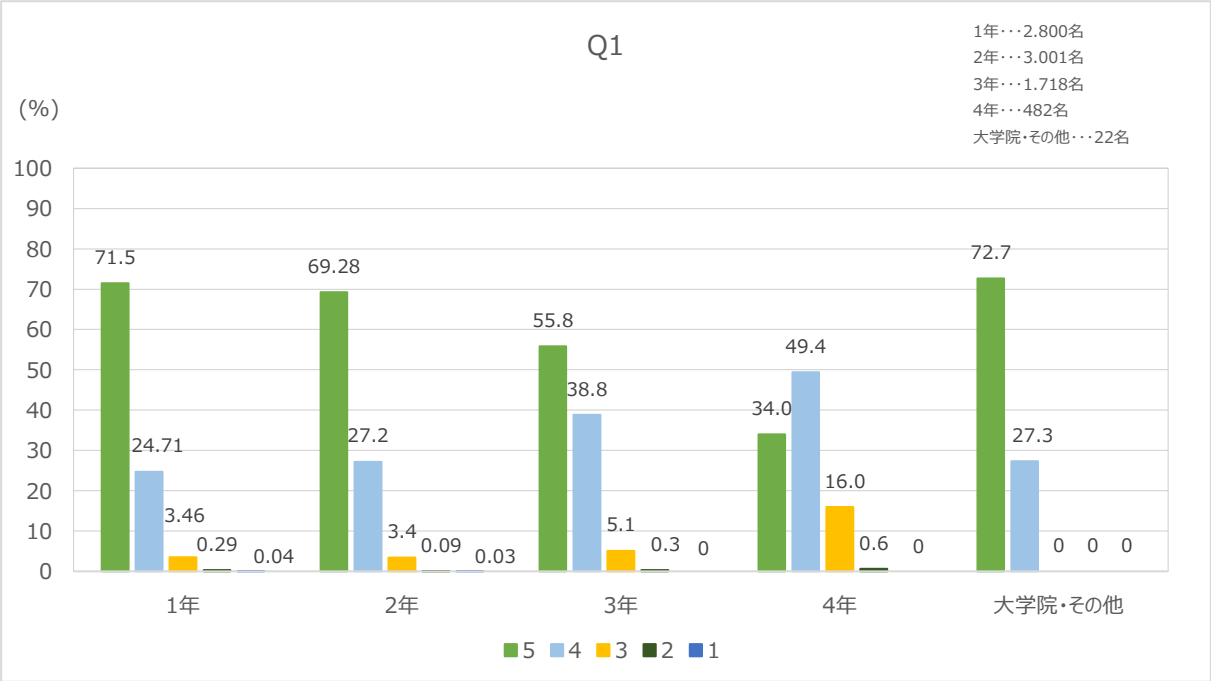
Q9. 教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった。

5. よくあてはまる　4. ある程度あてはまる　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　1. まったくあてはまらない

５．学年別の選択肢平均回答比率

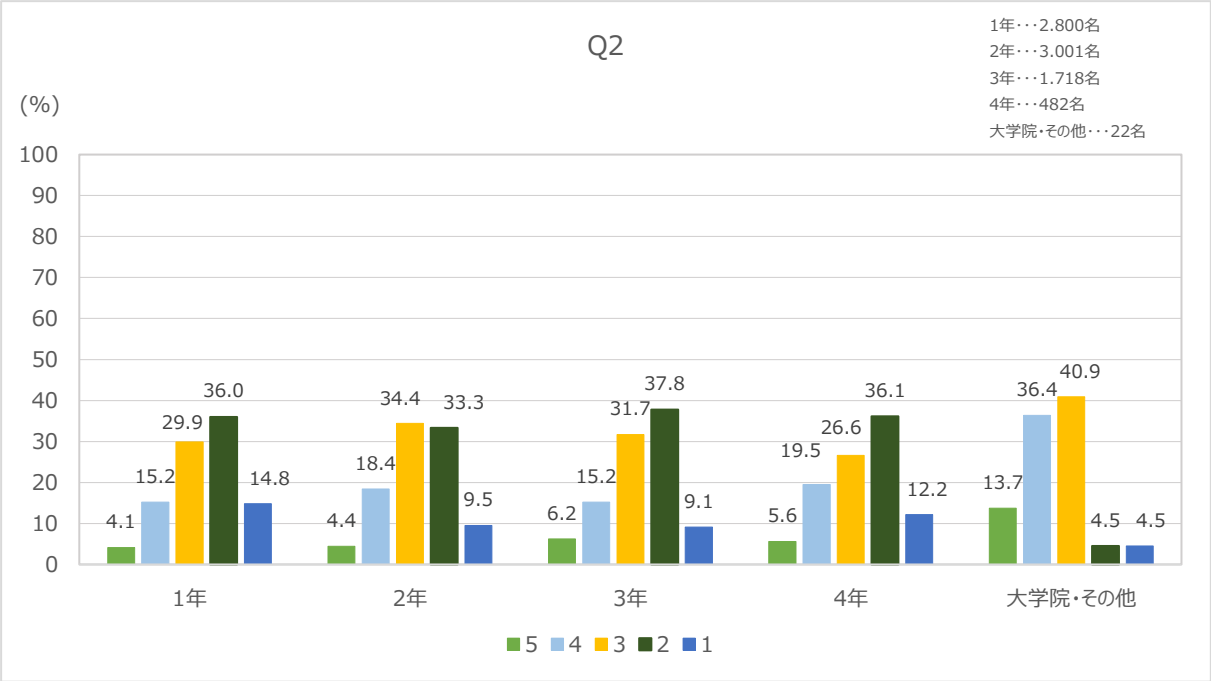
各設問に関して、学年別に評価得点の比率を比較した。全体に大きな差異はないが、授業への出席率については就職活動の影響からか、４年生において出席率が低い学生が多めであった。



Q1. この授業への出席率はどのくらいでしたか。

5. すべて出席した　　4. 1～2 度欠席したがほとんど出席した　　3. ３分の２程度出席した

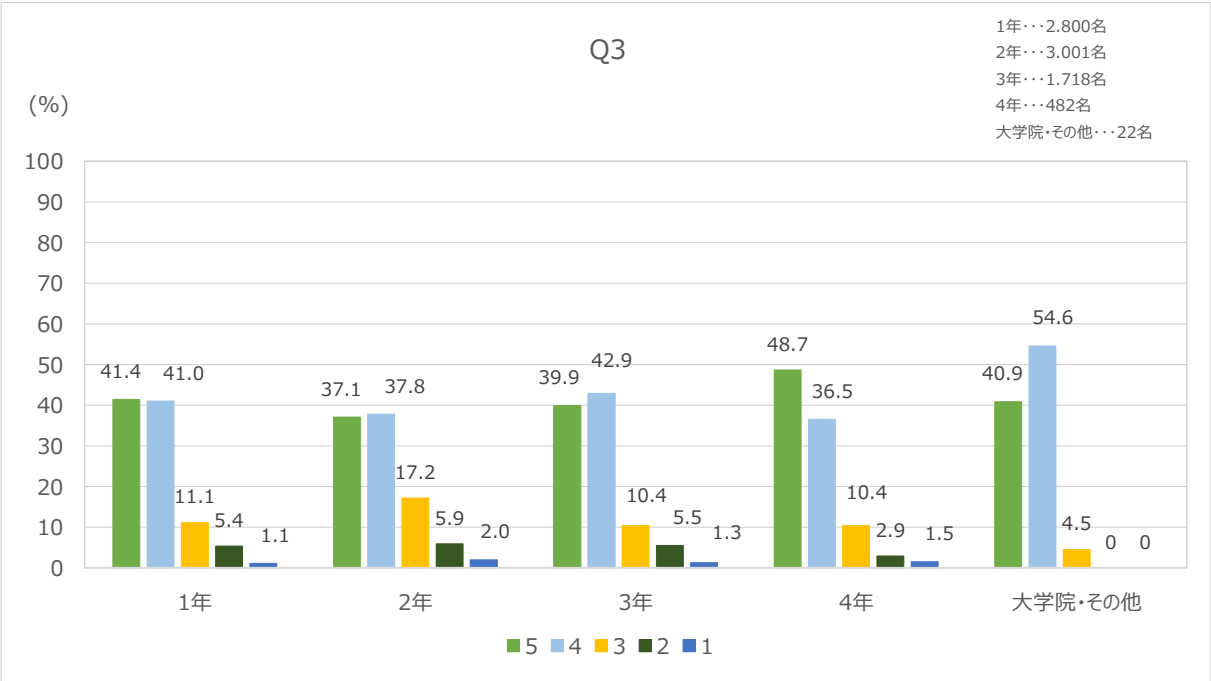
2. ３分の１程度出席した　　1. ほとんど出席しなかった



Q2. この授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか。(本やインターネットで調べるなども含む)

5. 週 2 時間以上　　4. 週 1～2 時間　　3. 週 30 分～1 時間　　2. 週 30 分以下

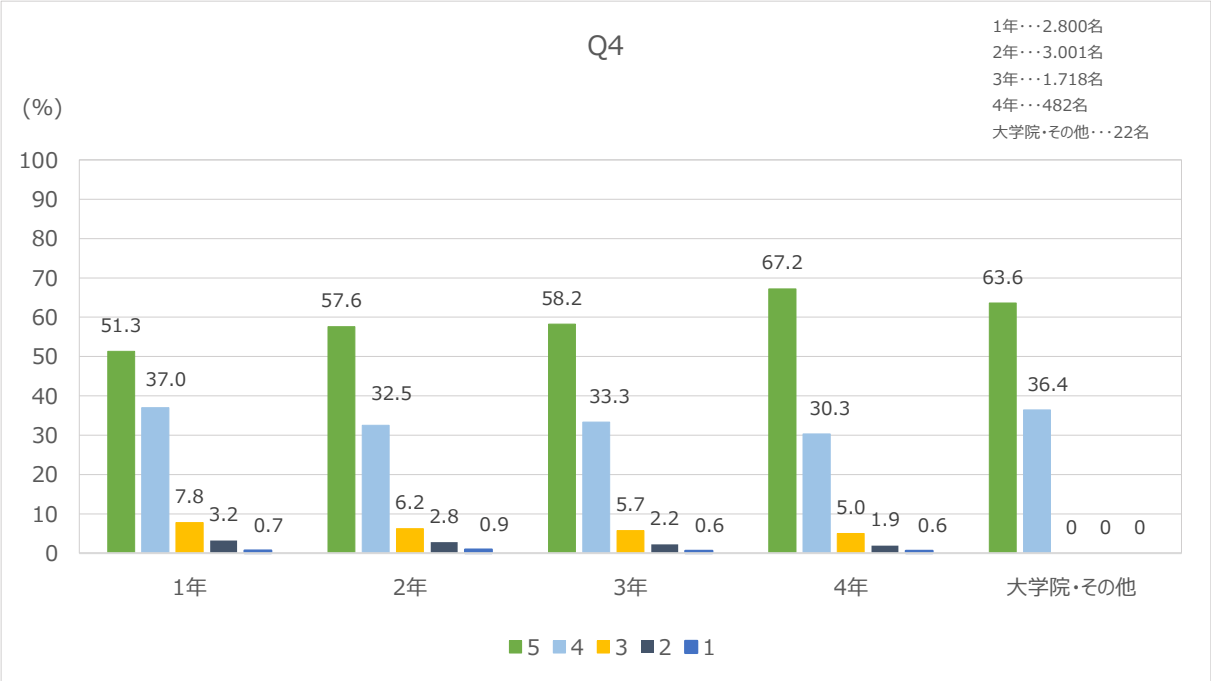
1. 週 0 分



Q3. 受講前からこの授業の内容に興味・関心があった。

5. よくあてはまる　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

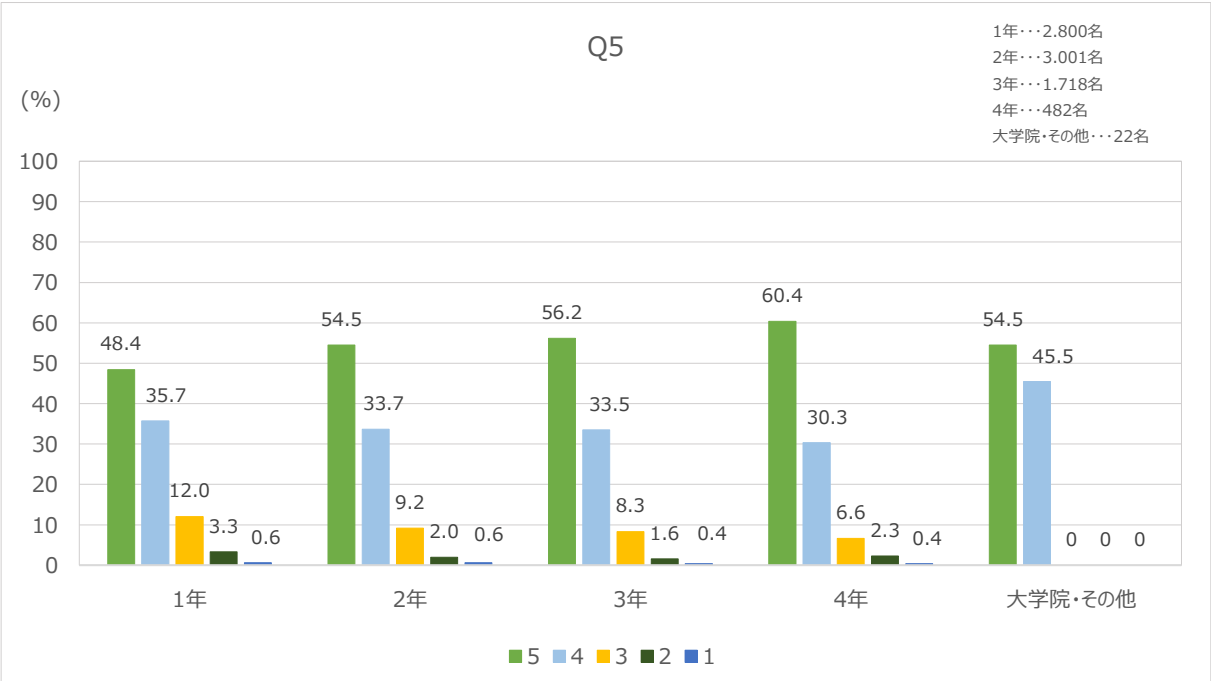
2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない



Q4. 総合的にみて、この授業に満足した。

5. よくあてはまる　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

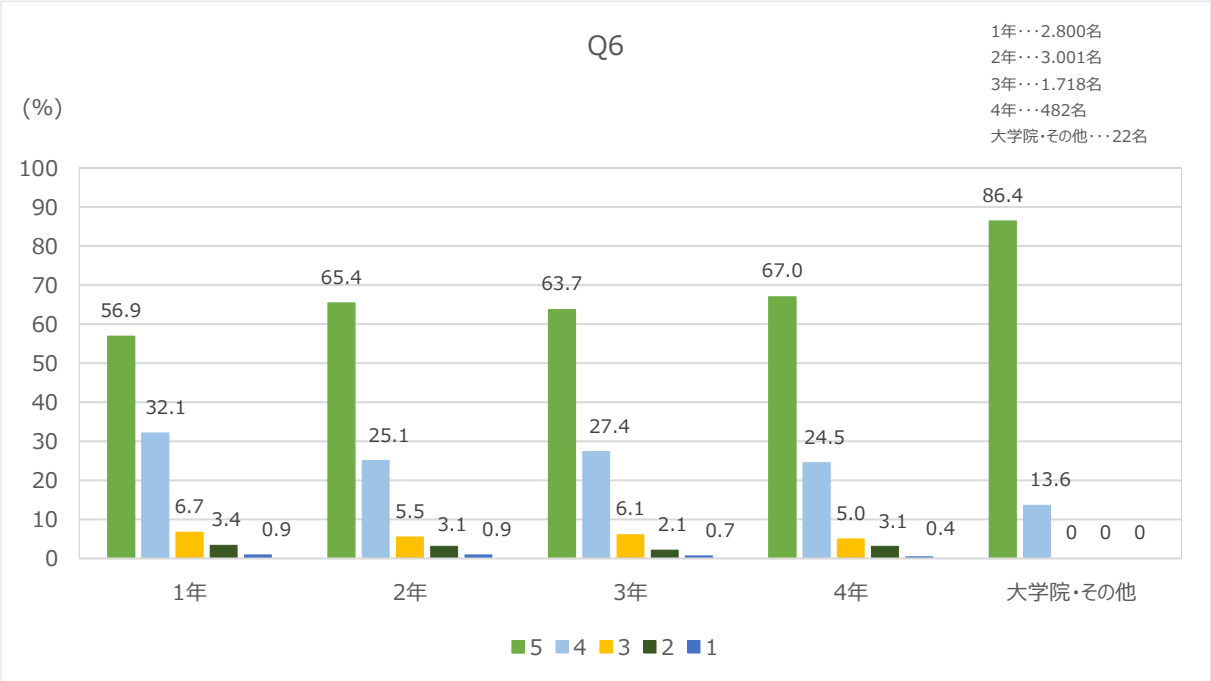
2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない



Q5. シラバスの記載内容は、この授業を受講するうえで役に立った。

5. よくあてはまる　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

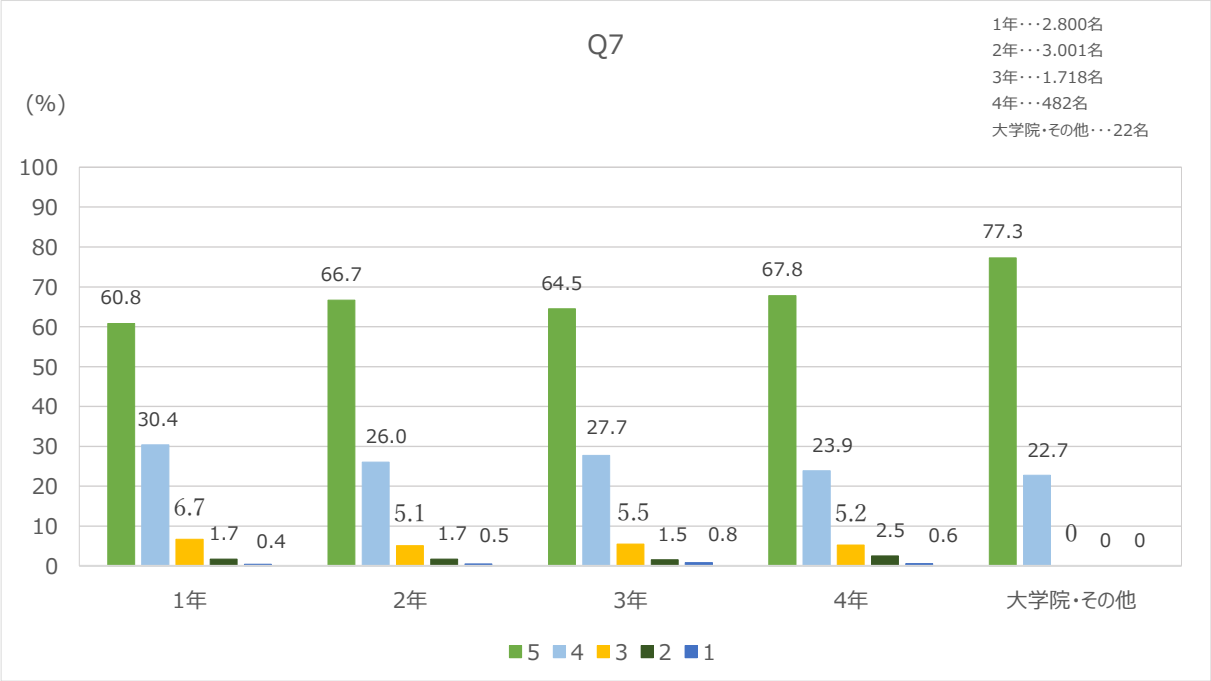
2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない



Q6. 教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった。

5. よくあてはまる　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

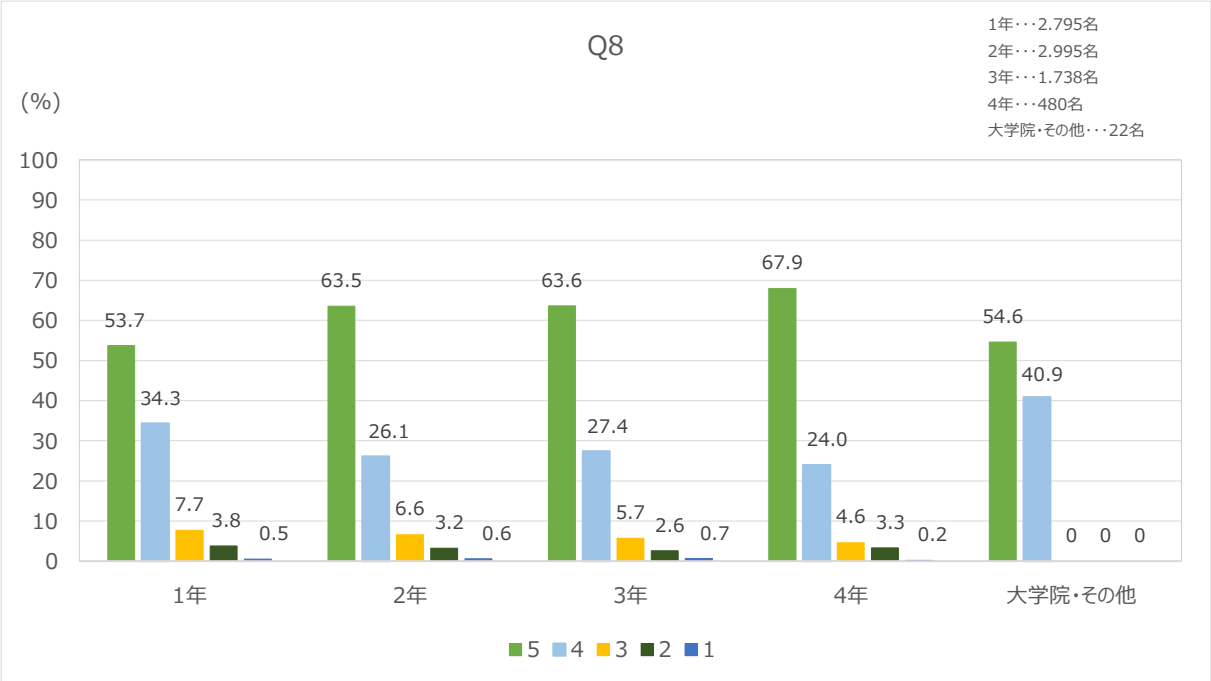
2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない



Q7. 授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った。

5. よくあてはまる　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

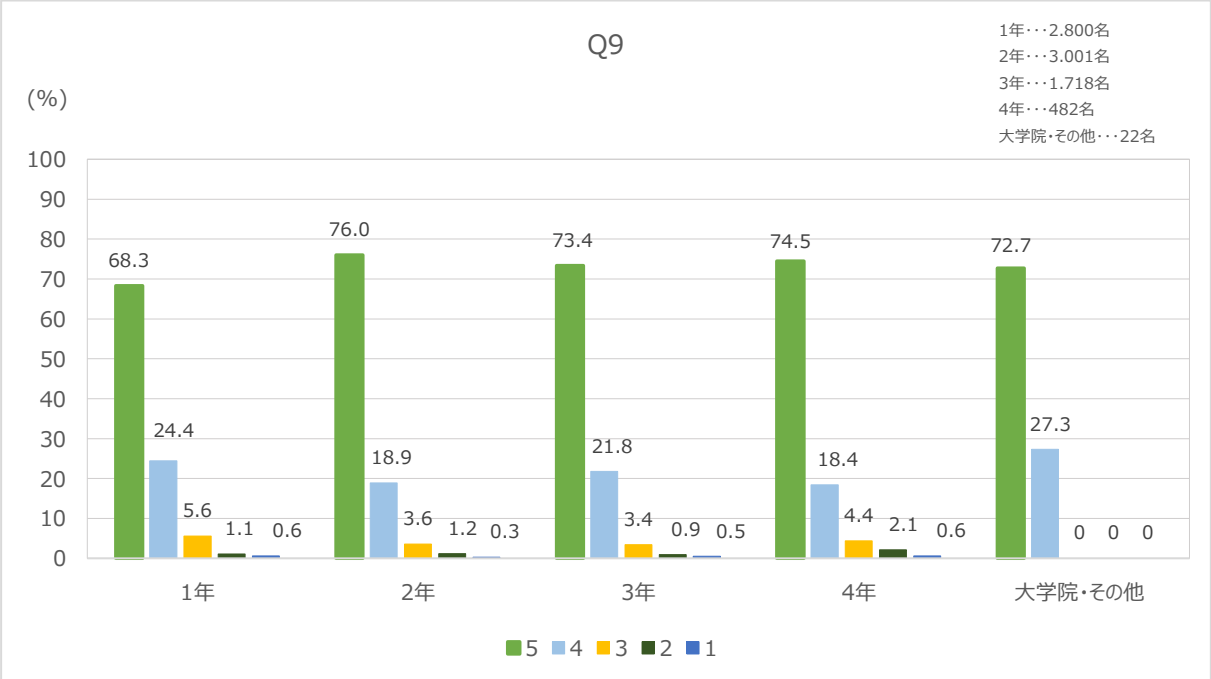
2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない



Q8. 毎回の授業内容の分量や速度は適切だった。

5. よくあてはまる　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない



Q9. 教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった。

5. よくあてはまる　　4. ある程度あてはまる　　3. どちらともいえない

2. あまりあてはまらない　　1. まったくあてはまらない

第２章　専任教員による授業報告書

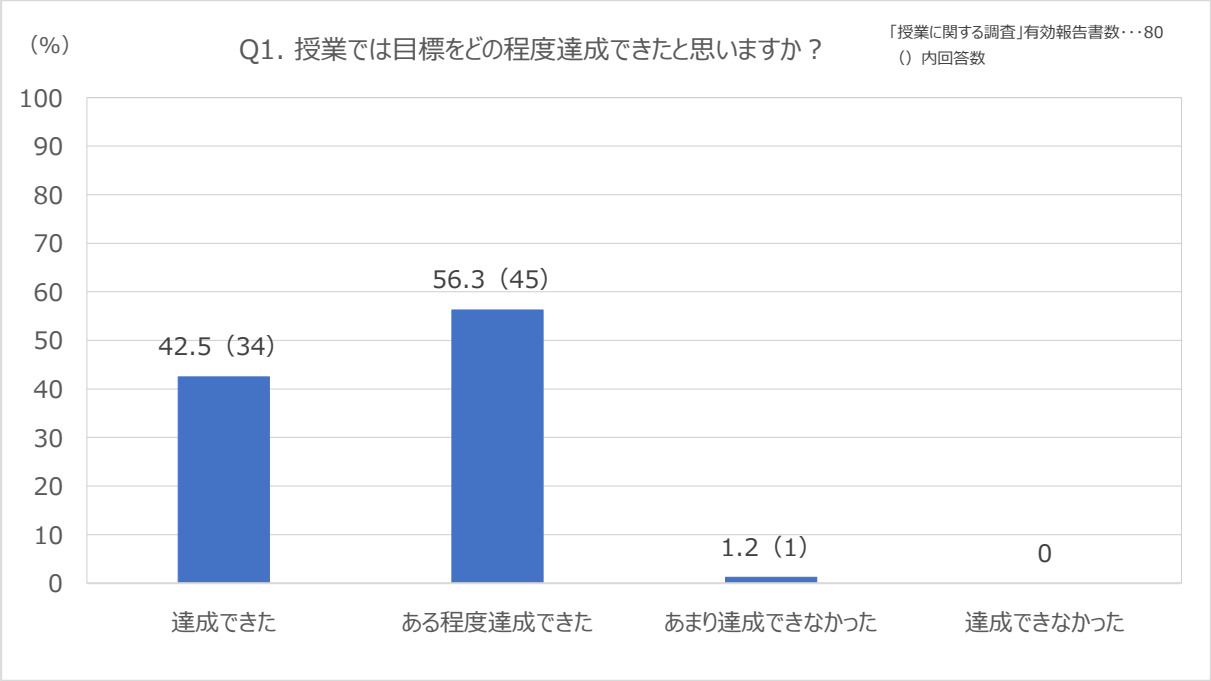
学生の授業評価を受け、各授業の担当教員は下記の点について、自らの授業を振り返るとともに、大学に対する提案を行うことで授業改善を図っている。

・授業目標の達成度認知
・授業の目標を達成する上で効果的な方法や工夫
・教室設備について（問題点等）
・教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について
・学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
・学科や大学全体として取り組むべきこと
・授業評価に関する意見、提言
・その他

１．授業報告のまとめ

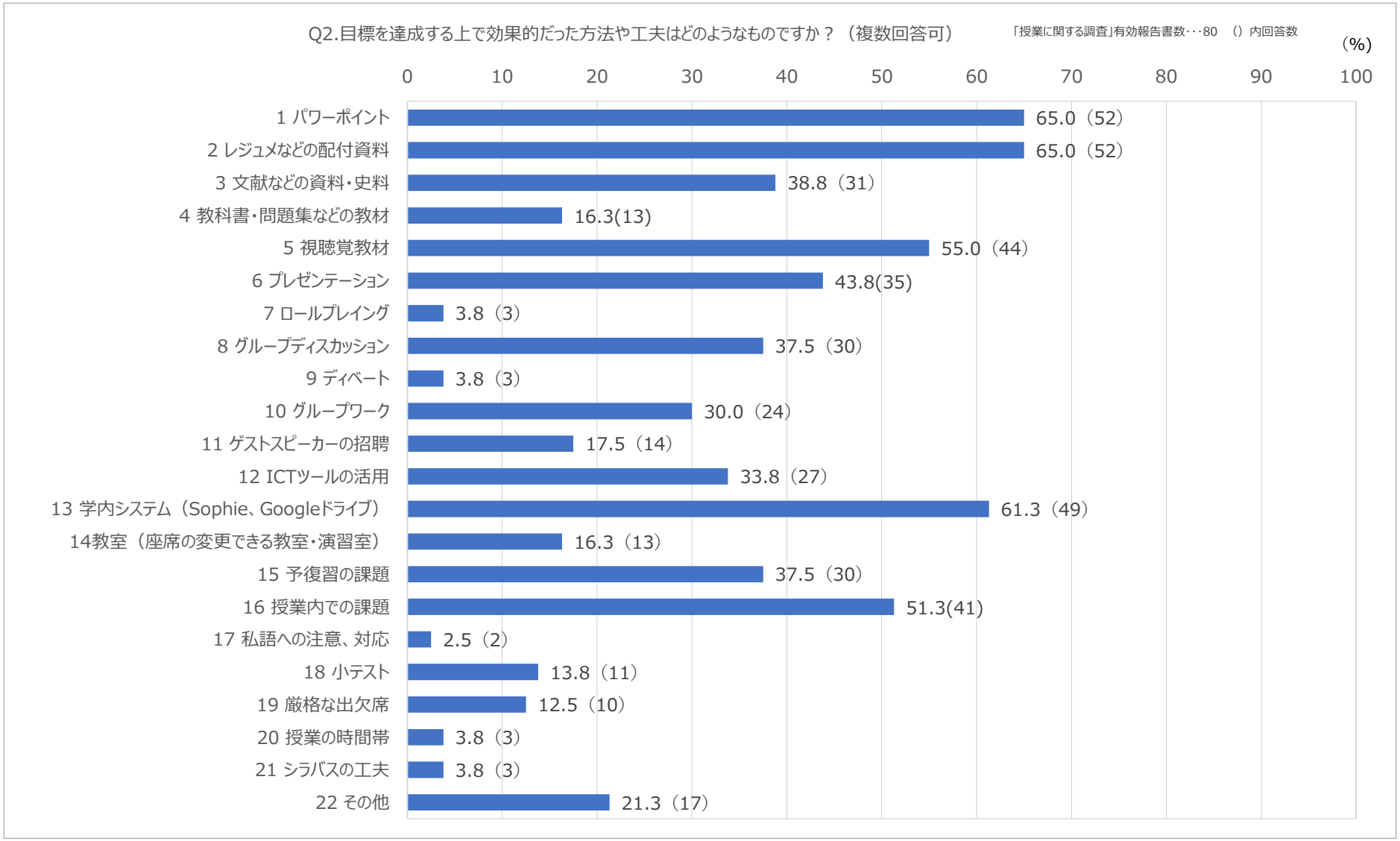
（１）授業の目標達成度

学生の授業評価を見た上で、専任教員に授業達成度を尋ねたところ、授業の半数弱で「達成できた」、残りの半数強で「ある程度達成できた」と回答されている。専任教員の認識としては一部に課題を残しながらも、授業は概ね目標を達成できたと考えられている。2021 年度からの変化は認められなかった。



（２）目標を達成する上で効果的だった方法や工夫

目標を達成する上で効果的だった工夫・方法としては、「パワーポイント」「レジュメなどの配付資料」が 65%と最も多く、続いて「学内システム（Sophie・Google Drive）」が 6 割、「視聴覚教材」「授業内での課題」が 5 割台で続いている。また、「予習復習の課題」「授業内での課題」も 4 割と多めであった。2021 年度に比べると、「レジュメなどの配付資料」や「ICT ツールの活用」がやや減少している。一方で、「プレゼンテーション」や「授業内での課題」「教室の使用」がやや増加し、対面ならではの授業形式が戻ってきている様子がうかがえる。


Q2.目標を達成する上で効果的だった方法や工夫はどのようなものですか？（複数回答可）
「授業に関する調査」有効報告書数･･･80　（）内回答数
（%）
0
10
20
30
40
50
60
70
80
90
100
1 パワーポイント
65.0（52）
2 レジュメなどの配付資料
65.0（52）
3 文献などの資料・史料
38.8（31）
4 教科書・問題集などの教材
16.3(13)
5 視聴覚教材
55.0（44）
6 プレゼンテーション
43.8(35)
7 ロールプレイング
3.8（3）
8 グループディスカッション
37.5（30）
9 ディベート
3.8（3）
10 グループワーク
30.0（24）
11 ゲストスピーカーの招聘
17.5（14）
12 ICTツールの活用
33.8（27）
13 学内システム（Sophie、Googleドライブ）
61.3（49）
14教室（座席の変更できる教室・演習室）
16.3（13）
15 予復習の課題
37.5（30）
16 授業内での課題
51.3(41)
17 私語への注意、対応
2.5（2）
18 小テスト
13.8（11）
19 厳格な出欠席
12.5（10）
20 授業の時間帯
3.8（3）
21 シラバスの工夫
3.8（3）
22 その他
21.3（17）

22.その他

・オンラインのリアルタイム授業とオンデマンド授業(毎回課題を提示し解答を提出させる)の組み合わせ
・自主研究の実践
・実技
・実習形式
・小休止
・体験訪問
・中間レポート
・反転授業
・フィールドワークの実施
・フィールドワークやミニ・インタビューの実施
・メールによる質問受付
・リアクションペーパーの共有
・ワークショップの実施
・課題・提出期限を設定しての提出物
・正答のない問いを授業の基軸に据えること
・独自の研究に基づくビデオの作成と教室内での作品鑑賞や相互コメント
・毎回の復習を兼ねた課題

３）各教員からのコメント

教室設備について（問題点等)、教員個人が取り組むべきこと、学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について、学科や大学全体として取り組むべきこと、授業評価に関する意見、提言、その他の各項目については自由記述形式で回答を求めた。

以降はこれらの項目ごとに、各報告をまとめている。教員名、授業名は伏せているが、原則、プライベートな情報以外は原文のままを掲載している。

Q3. 教室設備（空調・ICT 機器・マイクなど）や通信環境の問題について	
24	出入口～非常口が一か所のみ
25	コロナ対策とはいえ、15 名で質疑応答、ディスカッションをするには広すぎた
205	プロジェクタの色や鮮明度に問題があった
205	講義の合間に入れるループワークが、階段教室だとやりにくかった
217	wifi につながらない／つながりにくいことが何度もあった
221	ときどきプロジェクターの機嫌が悪いと映像が画面に出なかった
319	教卓真後ろ上部にあるエアコンと教卓前のアクリル板の間が狭く、空気が滞留しやすい、教卓 PC 電源が抜けていることが何度かあった
332	コロナ対策とはいえ、21 名に対して講義や全員のプレゼンテーションを行うには、広すぎた
教室不明	I use a lot of videos and the sound level in Media Room E was consistently too low
教室不明	学内の Wifi が不安定

Q4. 授業内容、運用、カリキュラム編成などについて、特にご意見、ご提言などありましら自由に記述してください。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について
映像を視聴する、オンラインで入手可能な映画脚本を紹介する、内容を口頭で説明するだけでなく、レジュメを作成し配布した上で、授業でのわかりやすい説明を心がけました。
担当者の日本語による講義を前期履修した学生数名に、特に著しい成長の様子がうかがわれた。本演習は、200 年前に書かれた 300 ページ超の英語の教科書を読んで、英語で進める授業であるため、どうしても量をこなすことに意識が向きがちであるが、学生の思考力を深めるためには、日本語で書く課題を取り入れるなど、立ち止まって日本語で消化する時間をもつとよいのかもしれないとも考えた。授業の進め方について、学生の日本語の能力をもっと活用する方法を考えたい。
感染症対策をしながら積極的な対話を促すゼミ形式の授業は、例年よりも工夫が必要だった。学生の座席位置の工夫だけでなく、オンラインツールと組み合わせることで、距離を保ちながらもディスカッションや共同作業をしやすくした。 ハイブリッド授業を行った時は、カメラで教室全体を映し、スピーカーフォンを教員のラップトップに繋いで教室の中心に置き、全員の声を拾えるようにした。このことにより、オンラインで参加した学生も授業の様子を見ることができ、ディスカッションにも参加しやすくなった。
オンライン授業で行って効果的だったので、対面の授業でも 10 分間の休憩を入れることにした。アンケートの意見・感想欄に「後半も集中できてとてもよかった」とあった。
学生からのどちらかと言えばネガティブな評価に対する対応
今年度は前期の「日本古代史Ⅰ-1」も含めて、学生があまり関心を持たないであろうテーマにしたので、漢文史料に訓読文や現代語訳を付けたり、図表を数多く作成したりしたが、それでも出席率はあまりよくなかった。しかしアンケートで出席した学生からは、図表などの資料がわかりやすかったという評価を得たのは幸いだった。
Google Classroom からリアクションペーパーを毎回提出させていたことで、学生の意見や理解度を知るうえで参考になった。
教室でリアクションペーパーを毎回提出させていたことで、学生の意見や理解度を知るうえで参考になった。 対面を主としながらも、新型コロナウイルス感染症による出校停止などの場合も、オンラインの併用により、可能な限り授業を受けてもらえるようにした。
今回、ワークシートを用いたグループディスカッションを毎回の授業で実施した。異なる意見に触れて、学生の理解がより深まったように感じた。
演習の人数が多くなると、どうしても何も発言しない（できない）学生が出てきてしまう。毎回何度も発言する学生とバランスをとることに苦労した。発言しない学生がなぜ発言しないのか（できないのか）について、ある程度しか把握できなかったので、この点について、もう少しきめ細かく対応したい。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について
Google クラスルームを使った資料の配布と課題の収集。配布資料はできるだけ早く共有する。
Classroom は大変機能的で、今後も継続を要望したいが、Google フォームには、学生が提出したのに届かない、回答のコピーも返らない（この場合、回答内容は消滅)、何度も送信ボタンを押しても送信されないといった原因不明のエラーが発生している。こうしたシステムエラーの蓄積が最終成績にも影響することを鑑みると、Classroom も万全ではない。次善策として、毎週の課題は Classroom で掲示、回答のコピーが返らなかったらすぐに連絡させ、エラーの連絡があった学生にのみ、課題フォームのコピーの URL を送信して再提出させるという対策をとった。1 回限り回答を解除する方法もあるが、今度は不正や怠慢、期限遅れの提出を防止することができなかったため、フォームのコピーで対応した。 一方、中間レポート課題は正規の教学システムの Sophie でのみ管理することとした。提出先を混乱しないよう、Classroom には Sophie でレポート課題を掲示したというアナウンスにとどめて、内容の詳細は記載しなかった。
人間関係学科では「人物の育成及び教育研究上の目的に関する規程」に「社会調査法の活用」を追加し、データ分析に基づく社会への貢献を重視している。社会統計学は要の知識・スキルであるが、その修得には復習や反復が必要である。授業内においても、たびたび過去の授業内容を引用し、各回の冒頭で前回のふりかえりの時間を設などの工夫を行った。これに関する学生からの好評価もあるが、半期の授業のみではその修得は基本的な内容に限られ、また、その後の活用経験によって定着・深化していくものと考えられる。社会統計学の知識を生かせるカリキュラムの充実が不可欠である。
2020 年度からオンライン形式で実施し、3 年目となる。チャットで全員に質問を投げかけ、回答を求めるなどリアルタイム感を出すためのコミュニケーションを取るようにした。また、授業の冒頭では、前回の授業の課題への学生の回答を整理し、全体の傾向をまとめフィードバックを行うことでふりかえりの時間とした。オンライン授業においては、学生が単に映像をじっと眺めているだけの授業にしないよう、双方向性を高める工夫が必要であるが、今後、オンラインの活用が進む中、技術的にもオンラインをより活用するための新たなツールが開発されることも期待できる。
3 年ゼミは、BE＊hive ワークショップスペースを使わせて頂いている。学生は、創造力あふれる気持ちの良いスペースで自由に発言できる雰囲気を気に入っているようである。ゼミは、卒論のための個人発表がメインとなるが、なるべく学生たちでゼミを運営させ、教員は求められるとき以外は口を出さないようにしている。2 年間のゼミ運営を通じて、切磋琢磨し、学び合える雰囲気を作る努力をしている。
学生が関心を持って自ら考えたり、調べたりして、講義に臨めるような工夫をしていければと考えています。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について
毎週の課題（リアクションペーパー、記述課題、発表など）の位置付けについては、学生に対して明確にしておいた方が良い。また、できる限りその内容を次週までに精査してフィードバックを学生に対して行うことによって確実に授業目標に近づくであろう。
現実の進捗が速いので、最適な知見を学生に提供できるために教師の日々の学習と研鑽が必要だと考える。
本授業は、小学校教員養成カリキュラムの中で、音楽科授業に必要な知識と技能を実践的に修得することを目的としている。講義科目ではあるが、受講生自身が動き、実践することを通して、必要な音楽理論と実践の技能、音楽科の学習内容に対応した歌唱・器楽・音楽づくりの実践的スキルと知識を学習する授業である。なお、実技指導にはピアノセルを利用して個人指導に近い形態で実技指導も行った。 ［受講生の実態］ ここ数年、音楽学習経験が非常に少ない受講生が増えており、「楽譜を全く読めない」「鍵盤楽器にはほとんど触れたことがない」という受講生も稀ではなくなっている。その一方でピアノ等の音楽学習経験を積んでいたり、課外活動等で豊富な知識と高い技能を持つ受講生もいるため、知識と技能の学習に関しては格差が大きく、レベル別の教材準備と指導に腐心している。 ［授業方法］ 前期 14 回の授業回数に対して、必要最低限に絞り込んだとしても、求めるべき楽典と実技技能の内容を取り上げるのは困難である。とくに音楽理論（楽典）に関しては自学自習を前提として編まれたテキストを最大限に活用した時間外の自学自習が必須である。また、実技に関しては課題の準備（練習）が指導の前提となる。したがって、本授業は受講生に求める時間外学習が他科目に比して常に多くなっていると予想される。もちろんどの授業においても、授業時間外学習は前提であるが。そのため、本授業ではよく練れて説明されているテキストを活用して自習範囲と自習方法を示し、受講生が自分で学習を進め自己評価するためのポートフォリオを準備して活用を促しているが、自学自習の習慣のない学生にとっては授業についていくのが難しかった可能背はある。 一方で、音楽学習経験が豊富な学生についていえば、基本的に本授業では高度な内容は扱わなかったため、より高度な知識を身につけ実技のスキルアップをしたいと考えた学生もいた可能性がある。音楽理論に関しては習熟度別に近い授業形態をとり、中には「コードネームが初めて理解できた、友達に自慢したい」と授業中に喜んだ学生もいたが、その一方で理解が追い付かず苦労したという感想もあり、こうした格差への対応については今後も検討が必要である。 実技（ピアノの弾き歌い）に関しては、授業補助者 1 名をつけてピアノセルを活用し、ほぼ個人指導に近い指導を 1 名につき 10 分強実施することができた。練習をして授業に臨んだ学生にとっては、非常に学習効果の高い授業になったはずである。
着任して 2 年、オンラインが多かったので、個人的には改めて対面での効果的な運営の仕方を考えようと思います。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について
今年度は対面授業となり、栽培、染色、ボトルフラワーなど、さまざまな実習を行うことができた。対面授業時も、適宜、動画教材やグーグルクラスルーム、ドライブなどを引き続き活用することは、予習や復習のために効果的であった。
オンラインの活用により、今回 248 名の登録をみた。内容については肯定的な評価が高いが、やはり大人数のオンライン講義のため、音声が切れることがあったようです。また、Sophie と Google Drive、Form、そして Zoom の連携に対する不満もあり、この点は学生に対して、シンプルな導線を工夫する必要がありました。
【教育方法について】 本授業では各回の予習として、事前に教科書の該当箇所について読みワークシートに「感想、考察、質問」を書いて授業に臨むことを前提としている。授業時間内には予習をもとに、学生同士のグループディスカッションと、教員も交えた全体での質疑応答を行うという、反転型学習の構造をとっている。予習を行うことにより大学の単位制度の理解と学習習慣の定着を図っている。そして、授業時間内での「資料・根拠をもとにした考察」の発表・他学生の意見への傾聴を通して、論理的思考力、批判的思考力、公共性などの資質・能力を涵養する仕組みとなっている。そして、子どもの発達の様子やそれに応じた保育環境の構成の在り方等についての動画を視聴することにより、具体的なイメージをもって教科書の内容が理解できるようにしている。 【学習内容について】 保育現場現場における各種の「保育・教育課程」「保育指導案」について、それらの構造・関係性・意義等を理論的背景とともに学びながら、具体的な事例に触れるようにしている。動画も視聴し、子どもの発達の様子やそれに応じた保育環境の構成の在り方等について理解し、保育・幼児教育課程の具体的なイメージをもつ機会を設けている。4 年次の教育実習を経験する以前の学生は、保育現場での保育・幼児教育課程のイメージ、乳幼児の具体的な姿のイメージが持ちにくい。本授業の一環で保育現場に出かけ実際の様子に触れ、肌感覚をともないながら理論と実践の往復を学生が行う機会を作り出したい。
本授業は、保育士資格取得のための必修授業であり、保育士という職業において直結する授業でもあるため、実際の保育の映像（視聴覚教材）を使用し、具体的な事例をもとにグループワークを行うことで、乳幼児の施設とかかわりが薄い学生にとっても、イメージし易かったようである。更に、教科書や資料で 0～2 歳児の発達過程を理解するのと同時に、映像でも確認できるように工夫をした。また、子育て支援室（マーガレットルーム）を利用し、設備や遊具等の物的環境を学べたことも効果的な学習に繋がったと考えられる。
授業前の予習の課題は十分であったと考えるが、復習課題が不足していたように思われる。出席状況や授業中の討論は積極的な学生が多かったが、授業外での学習は、授業後の復習より翌週の予習が主となっていたようである。今後は、授業後に考察を促す課題を工夫したい。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について
学生にも授業に対する動機づけには個人差があるので、関心をもって自身の学びを進めていくものと受動的にその場限りで終わらせ、残念ながら次第にドロップアウトする学生がいたと思います。 むつかしい面が大きいのですが、様々な学生がそのレベルに合わせて学べる工夫が必要に思います。そのためには、授業内容についての知識を与えることを優先することよりも、授業内容を減らしても、その場で考えること、その場で考えるために予習、復習の中で時間を取りたくなる工夫をすることが必須であることを感じています。実際に、別の授業において参加人数も50 人以上いたのですが、ディスカッションの時間を取り、発表してそれぞれの考えを共有するといった試みは、自身の考えでは考えつかなかった視点を持つ機会になっていました。学生の積極的な学びや、視点を広げられる方法を来年度さらに検討したいと思います。
昨年に引き続き、初回に 2 冊のテキストの発表者を決め、毎週、発表者以外も事前に該当章を読ませ、2 週間前までの質問の提出を義務づけた。一コマあたり、おおむね 2 名の発表者がプレゼンテーションを行ったあと、授業中に教員が全般的なコメントを行い、引き続き、全員でディスカッションを行った。事後学習として全員にリアクションペーパーを義務づけ、それらを受けて教員によるコメントをクラスルームに掲載した。学生の自由記述（2 名のみ）を見ると、2 名とも準備時間がかかって大変だったようだが、テキストの熟読の大切さもわかったようで、おおむね、好評であった。
前半には、性格の個人差についてのレクチャー、レポートとレジュメ作成のレクチャー、プレゼンテーションのレクチャーの後、1 回目のレポート（2000 字以内）とレジュメをクラスルームに提出させ、毎時間数名ずつプレゼンテーションを練習として行わせた。そのあと、前半のまとめとしてレポートやプレゼンテーションの注意点を講義すると同時に、全員のレポートとレジュメを添削して PDF 添付でクラスルームに掲載した（他の受講生のレポート添削を閲覧することで、全員のレベルアップに有効だった）。後半には、女らしさについてのレクチャーの後、2 回目のレポートを提出させ、毎時間数名ずつプレゼンテーションを行わせ、最後に、まとめのレクチャーを行った（1 回目と同様に、レポートとレジュメの添削をクラスルームに掲載した）。また、毎時間、全員にリアクションペーパーの提出を義務づけると同時に、他の受講生のリアクションペーパーを読むように指導した。2 回のレポートとプレゼンテーションに関して、自分以外の全員の受講生ごとにグーグルフォームにより評価を行わせた（このことにより、自分の評価軸を身につけさせ、自らのレポートやプレゼンテーションのレベルアップに有益だった）。また、リアクションペーパーに対するリプライや参考文献等は、毎回、教員がクラスルームに掲載した。
ICT ツールなどの活用は今後ますます重要だが、一方で、コピペによる剽窃はもちろんのこと、AI 技術の進化（ChatGPT、DL 翻訳など）によって課題等の「省力化」が広がることにどのように対処するかが求められる。ただ、不正防止というだけでなく、自覚を高め、こうした技術も使いこなして真の知識や知的能力を獲得することができるような授業方法が求められる。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について
本授業では、講義形式と演習形式の両方をバランスよく取り入れて授業運営を行うように努めた。また、本授業用の Google クラスルームを通じてオンライン上で事前に、予習課題となる文献資料や、前回のリアクションペーパーのまとめや、授業当日の講義用（演習用）レジュメをデータで配布してあらかじめ熟読してきてもらった。そのため、特に演習形式の授業回では、授業当日の教室での教員からの説明を最小限（確認程度）にとどめ、学生には事前に資料を読んできてもらっていることを前提に、グループワークやグループディスカッションに取り組んでもらった（※もちろん講義形式の回には、教員からの説明を行う機会もしっかりと設けてある）。その結果、受講した学生からは、本授業のアンケートの自由記述欄にて、下記の通り、意見をもらった。 ・「毎回オンラインで事前に資料や〔リアクション〕ペーパーが配られるので、とても便利だったし、自分の意見を考える時間を作れました」 ・「グループワークと講義形式の授業両方あり、とても楽しく授業を受講することができた。先生の説明の仕方もとても分かりやすく、授業を受ける前よりも将来教師になりたいという気持ちが強くなった。先生が紹介してくださる文献や資料もとても勉強になり、前期を通して教職に対する考え方が大きく変わった」 ・「様々な現代社会問題と教職という職業についての関係性を、様々な視座から捉えることのできる機会が多くあり、大変刺激になった。また多くのディスカッションの場、他者の意見を聞くことで自身の考えをステップアップできる経験にもなった」 ・「グループワークの時間や、授業最初に前回のコメントペーパーの紹介や説明があるおかげで、違う人の意見を知ったり、新しい気付きを得ることができたりして面白かったです」

②学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
Small group discussions; several innovative group projects
Small group discussions; visits /excursions outside of the school – very glad to be able to do this again after two years of lockdown.
プレゼンテーションはどの授業でも学生は比較的積極的に取り組むと思う。
①に書いた内容と重なりますが、英語による授業を実施するにあたり、わかりやすい説明を心がけました。映像の内容を文字（脚本、レジュメの解説）でも確認できることで、学生がグループディスカッションやプレゼンテーションに積極的に取り組むことができたかのではないかと思います。英語で発言する、英語を書くことに前向きになれる雰囲気づくりも大切だと感じました。
授業自体についてではないが、アンケートにゼミ生同士の交流がもっとほしかったという意見が出された。コロナ禍前には実施していたゼミの食事会がしばらくできていないことも大きいと感じた。新年度は授業内でもふだん話す機会のないゼミ生と共同で取り組むような作業をもりこみたい。 ・グループワークで、毎回役割をかえて、全員が司会から創作まですべての役割をこなすようにした。テクストを読むという課題は同じだが、グループ内での役割が毎週変わることが新鮮で興味が持続したという学生の声があった。特に、作品テクストを元にして、自由に視覚化した作品を創るという役割は、それぞれの個性が出て、授業を活気づけるのに役立ったので、今後も続けたい。
各回の学生のプレゼンテーションでディスカッショントピックを学生が提示し、クラス内の話し合いの後に Google Classroom でも一人一人意見を出し、それをまとめたものを翌週に報告するルーティンを作った。そのディスカッションに参加するために、発表者以外の学生が発表に用いたパワーポイントを共有して欲しいというリクエストがあったため、授業後すぐに Google Classroom に発表資料を掲示できるようにした。このことにより、復習がしやすくなったとの意見が聞かれた。また、報告の際に誰からどんな意見が出されたのかわかるように個人名を出しながらまとめを発表したことで、各学生の授業やディスカッション参加への意識が高まった（個人名の使用は学生の任意によるもの）。 セメスター後半の授業に用いた文献は、学生が選んだ物を使用した。必ずしも知識がなくても興味がある題材を用いたことで、学生がこれまで以上に予習に力を入れて授業に臨み、クラスディスカッションも非常に活発になった。 Google Classroom に”data pool”を作り、全員から授業で扱った題材の例（今回は広告）を提出させ、クラス全体で共有し、それを使った分析セッションを行った。他の人のデータを分析したりディスカッションすることで、自分では気づかないことに気づいたり、いつでもそのデータにアクセスして自分の興味を深めたりすることができた様子だった。 ディスカッション中心の授業にすると、予定していた題材を全てこなすことができず、時間が足りなくなってしまうことが多くあった。学生の理解度にも照らし合わせ、扱う題材の量を加減する必要がある。

②学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
今年度から対面授業に戻ったが、授業内課題ならびにリアクションペーパーはオンライン授業の際と同様に Google フォームを利用して行った。特に授業内課題においては、デジタル化したことで即座に集計ができるようになったため、その場で回答結果のグラフを提示したり匿名のコメントを共有できたりしたのは、大変効果的であった。 その一方で、ペーパーレス化の動きとは逆行するが、授業で用いるレジュメは全て紙媒体で印刷をして配布した。理由としては、PC を持参していない学生も多く、まとまった文章を原文で読むという当授業の性格上、スマホや小さめのタブレットでの閲覧では学習効果が上がらないと考えたためである。紙媒体での配布は概ね好評であったようだが、少数ながら PDF でのデータ配布を希望する学生もいたため、次年度以降、レジュメの配布形態については再検討していきたいと思う。
・講義の授業が単調・受身にならないよう、クイズやグループディスカッションの時間を作り、変化をつけた。 ・毎回、ディスカッションやリアクションペーパーで意見を交わしたり、全体で共有したりして、双方向の授業になるよう心がけた。 ・リアクションペーパー（Google フォーム）にはわからなかったことや授業中に自分で考えたことを書くように指示し、翌週の授業の冒頭でコメントしながら紹介した。特に、留学生（受講生の 1 割ほど）のコメントは毎回興味深く、これらを紹介することで、日本人学生の日本語に対する考え方が変化し、いい刺激になったと思われる。
【授業のやり方とねらい】　　講読の授業としては、少し変わった方法を取っている。ヨーロッパ中世に関する様々な話題に関し、日本語で解説したプリントを事前に Classroom で配布し、読んでおくことを求める。授業当日にそのテーマの短い英文を配布し、前半を費やしてその場で訳文を作成してもらい、後半で答え合わせをする。各自が自分の答案を点検したうえで翌週までに訂正した訳文を Classroom に提出する。これを添削し、理解が不十分なものには再提出を求める。これを毎回繰り返す。
ほとんどの学生は積極的に授業に参加し、毎回必ず出席していた学生も多かったが、前回基礎課程演習を担当した時と比較して学生の習熟度にばらつきがあり、人前で話すことに抵抗を感じる学生もいるように見受けられた。非常に優秀で積極的に参加する学生もいるが、大学での授業に参加するための準備が十分できていない学生もおり、もし可能であればクラスの中である程度コース分けを行い、そうした学生についてはテキスト読解やレポート執筆について基礎的なトレーニングから始めた方が、本人にとっても他の学生にとっても良い結果となるのではと思われる。
英語読解力の向上のみならず、テキストを通じた特定テーマの知識習得に力点を置いた。そのため、丁寧な文法開設のほか、テーマに関連する動画の視聴や資料の配付を行い、また、口頭で背景説明をおこなうことで、「情報収集の道具としての英語」の大切さを伝える授業作りを心がけた。
・人数が比較的多めの授業だったが、発言を求める機会を設けた。

②学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
資料は穴埋めなどにせず、講義のスライドをそのまま配布資料とした。資料なしや、穴埋めにすると、学生はノートを取ること、穴を埋めることだけに集中しがちで、講義全体の理解がおろそかになるためである。手元で印刷したい場合に備えて、毎週の授業の数日前に資料をClassroom にアップロードした。 講義内容は、教科書的な理論の学びをトップダウンで指導する概論ではなく、理論を社会現象に応用した事例として構成し、テーマに沿って教員自身の研究や学生の研究（卒論や実習）も紹介している。そのため、研究がより身近なものとしてとらえられ、１・２年次生にとっては今後の学問的な方向性を検討する機会ともなっている。 大教室の一方的な講義科目では、リアルタイムオンライン型が（400 番教室での対面よりも）はるかに教育効果が高い。私語を注意する必要がなく、意欲的な学生は自分のデバイスに集中できる。また、授業中課題（Google フォーム）を出して、休憩明けに受講生のリアルな回答結果を解説しながら理論の理解につなげるなど、ICT の活用においては大変に機能的である。オンラインは、これまで大教室の講義科目では難が多かった双方向、参加型を可能にしており、今後も、オンラインという授業形態を一部に残せるとよい。(ただし、オンラインリアルタイム型が対面よりも圧倒的に有利なのは、受講生が多く、私語のコントロールが課題となる大教室の講義科目のみである。少人数の授業や、ワーク課題やグループディスカッションを含む授業には適していない。) 一方、オンラインでは学生の不正や怠慢をコントロールできないという問題がある。そのため、本授業では、成績評価を、(1)出席確認を兼ねた知識チェック、(2)勤勉性と理論の応用力を確認するための中間レポート、(3)最終試験のみ対面で論述試験、という形をとった。(1)～(3)は互いに相関はあるが、すべてにおいて成績のよい学生群、すべてにおいて成績の悪い学生群、時間と労力をかけて丁寧に取り組む中間レポートで好成績だった学生群、制限時間内に総合的な理解と応用を問われる論述試験で好成績だった学生群、というように、それぞれで異なる側面を評価していたことが確認され、多方面から評価できたと考えられる。人数も多いことから、採点作業は負担が大きかったが、不正や怠慢をコントロールできないというオンラインの弱点を補う方策としては有効であった。 なお、成績の提出後、採点方法や手順、上方修正のルール、平均点、受講生全体の成績分布、レポートや論述の解答内容に対する全体講評などを資料にまとめて掲示している。さらに、正規の成績確認制度とは別に、個別の講評を希望する学生には対応することもアナウンスしている。毎年、数名から希望があるが、成績の内訳だけでなく、レポートや論述試験についても簡単なコメントを返し（オンラインで面談の場合もあり）、成績の良かった学生も、悪かった学生も、講評を得てそれなりに納得・満足している様子である。
パワーポイントをできるだけ簡素化し、画面上の文字ではなく口頭での説明を充実化させた。これにより、説明の仕方への満足感に関しては９割が「あてはまる」と回答しているなど、授業への集中力を高める一助になったと考えられる。

②学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
2022 年度は 2 年ぶりの対面授業であった。ただ、対面でのメリット感はあまり感じられなかった。社会統計学に関しては、そもそも多くの学生について事前の関心や予備知識がないところからスタートすることになるため、授業時間中のモチベーションや集中力をいかに維持するかが授業運営上の一つの大きな課題となる。オンラインを用いた場合、都度、チャットを用いて質問を投げかけ、各学生がそれに回答する方法によって関心を維持することができた。対面では「挙手」や「つぶやき」という方法を用いてリアクションを求めたが、回答を自身の手で入力するという動作がないため効果は限定的にならざるを得なかった。 対面形式は維持するとすれば、各自が手元のスマホ等を用いて入力し、画面上にチャットを表示できるような技術的工夫を検討してみたい。
4 年生の先輩や、近年の卒業生を招いて交流会を開く試みは、大変に評判が良い。3 年生の関心は、もっぱら就職活動やフィールドワークについての事だが、近しい先輩からの情報は具体的に役立ったようである。また、ワークショップ参加によって現実社会の問題を研究に落とし込んでいくことの重要性も学ぶ事ができ、有用であった。
任意のノート評価を実施。先輩学生のノートも紹介。
本授業の評価の内訳は、「研究の発表（60%）」「議論での質問等の積極的参加（20%）」「研究内容（20%）」であった。「研究の発表」では、受講生が自身の研究に関するプレゼンテーションを行い、その内容やわかりやすさ、発表後の質疑応答の適切さ等をもとに評価した。「議論での質問等の積極的参加」では、発表者以外の受講生が、発表に対して質問や助言などを積極的に発言しているかどうかをもとに評価した。「研究内容」では、7 月末に文献レビュー（卒業論文の序論部分）の完成度をもとに評価した。 これらのうち、特に 2 つ目の「積極的参加」を促すため、質問スキルの向上のための動画を作成し、Google クラスルームで閲覧できるようにした。また、発表のスライドは、発表者以外の受講生にも事前に共有した。とりわけ、質問等が苦手な学生に対しては、事前にスライドを確認して質問を考えるように促した。それらの結果、過去の授業と比べても、質疑応答が活性化した（前年度の総発言回数が 117 回、今年度の総発言回数が 231 回。なお、前年度の受講生は 14 名、今年度の受講生は 10 名。ただし、前年度は緊急事態宣言に伴い大半がオンライン授業形式で、今年度は対面授業形式）。 こうした取り組みの効果とは一概に言えないものの、学生が質問の仕方やそもそも何を質問していいかがわかっていないことが、積極的発言を抑制している可能性が考えられる。学生の質問スキルを底上げすることは、授業への積極的な参加を促す可能性がある。
事前に、読んでおいてもらう資料を提示しておいて、それについて、少し考えておいて、何か書いてみておいてもらうこと視聴覚教材や最新のニュースを紹介することで、より身近に感じてもらうようなことも効果的だと思いました。
基礎の知識を講義した上で、学生が楽しく能動性で取り組める適切な課題を出すこと。学生の提出物にたいしてはリアクションペーパーも含め必ずリアクションをすること、など。

②学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
講義形式の科目は、大変意欲的に興味を持ってポイントを理解し発展的に調査を深める学生と、聴き流して難しいと感じてしまう学生がいる。両者が交わりクラス全体としての理解と習得、連帯を高めるためには短時間であってもグループワークを取り入れることが効果的である。ただし、学生は教員からの講義すなわち知識伝達を期待しているため、講義形式の科目（演習ではない科目）でグループワークばかりでは、担当教員が教員としての役割を果たしていないと感じられるケースもあるようである。→オンラインにおいて、対面にはない積極的な参加が見られた。これを活用すべきと思う。
オンラインにおいて、対面にはない積極的な参加が見られた。これを活用すべきと思う。
予習のために Google フォームで、次週のテキストについてのコメントや疑問点を毎週提出させ、それらを Google クラスルームに授業前にアップし、全員に目を通すよう指導した。また別の演習では、同様の課題を授業後に提出させ、それをアップして他の受講者の意見を読ませることによって、復習を促すことを行った。
この授業は例年 100 名以上の履修があり、教室での授業では私語や集中できない学生への対応にかなりの労力を割かざるを得ない状態が続いていたが、コロナ禍における 2 回のオンライン授業ではそうした問題が自ずと解決され、受講生からのアンケート評価もかなり向上した。大教室での授業に較べて、ひとりひとりの受講生がそれぞれ授業内容に集中できる状態を作り出せたことが大きく作用したと思われる。原則対面に移行後も、オンラインによるメリットを生かせる授業については、オンラインでの実施を積極的に検討すべきであると考える。
ICT ツールなどの活用は今後ますます重要だが、一方で、コピペによる剽窃はもちろんのこと、AI 技術の進化（ChatGPT、DL 翻訳など）によって課題等の「省力化」が広がることにどのように対処するかが求められる。ただ、不正防止というだけでなく、自覚を高め、こうした技術も使いこなして真の知識や知的能力を獲得することができるような授業方法が求められる。
実習をするだけでなく、講義内容の定着を図るため、講義、グループディスカッション、動画教材をとりいれることで、知識を確実にし、体験したことだけで終わらずに、幼稚園および小学校の教員となる上での実力をつけることを意識した。
Google　classroom を活用して、実技指導に関して必要な教材（楽譜）と模範演奏動画をドライブで共有した。このような形を実技の e-ラーニングと称している教員養成校もあり、学生にとってはいつでも模範演奏を確認することができ、練習の助けになったはずである。使用したテキストは、自分で学習を進める人を想定して丁寧にわかりやすい解説が付されたものであり、現場教員の使用も多い。卒業後も、わからないところがあればこのテキストで学習することができるものを選択している。
期末レポート課題を初回授業時に示し、課題に取り組む意識を高めて授業を展開したこと、資料作成時には、学生が知っていてそうで知らないというような意外性を意識して作成したことが効果的であったように思います。

②学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
・学生それぞれの事例研究に合わせて、事例における課題を発表により明らかにし、それを基にグループディスカッションを行った。 ・それぞれの事例で学んだ内容をクラス全体で共有することにより、子どもへの支援保育者の役割について、多様な方法を理解できるようにした。 ・実践的な課題への取り組み、特に授業内のワーク（事例に関する考察と考察後の発表）は大変効果的であった。 ・学生の事例研究テーマが、障害児支援、愛着障害、精神疾患への対応、児童虐待防止、乳児への支援など多岐に渡っていたため、学生同士でお互いの事例研究に興味を持ち、知識や現状を把握したいという要求があり、発表を重ねる中で議論が活発になった。
本授業では、事前課題として次回授業で用いるスライドの空欄を、教科書を見ながら埋めて提出するようにした。予習として教科書を読む事で内容を把握し、授業では重要な内容の確認とともに、視聴覚資料（実践授業事例の動画）などを見る時間を確保した。前半の講義を効率的に進めることができたため、後半の模擬授業で全員 1 度は先生役をやってみることができた。
毎回、具体的な事例や動画を基に、少人数でのグループディスカッションを重ね、それをクラス全体でも共有する時間を確保することで、それぞれの学生が自分以外の他者の考えや視点によって自らの視野が広がる実感を持つと同時に、自ら考えや意見が他者にとって価値のあるものとして受け止められる喜び、また、そこから多様な他者と協働的に思考を深めていく面白さや手応えを感じられるよう、全体共有の時間を丁寧に持つことを心掛けた。
本授業は 4 年次の教育実習に向けて事前指導に位置づけられている。基本的な考え方や基礎的知識を伝えた後で、複数回にわたって実習を終えた 4 年次生から学ぶ内容を設定したところ、大変に効果的で、4 年生にとっても自分の体験を言語化することによって身に落とし込まれる感覚をもてる機会になった。「学び合う」という教育方法の効果の大きさを感じる授業であり、学生自身もこの点をこの授業のよさに挙げていた。
学生の授業の振り返りへの回答より、授業毎にリアクションペーパーへの返答の時間を設けたことがリアクションペーパーを書く動機につながり、授業を振り返るよい機会になったと思われる。
講義を知っているもの（教員）が与えるのではなく、積極的に学生が調べたり、自身の考え以外の見方に気が付く工夫が必要なのではないかと思いました。
事例についてのディスカッションなどを導入して、学生のアウトプットを促進する。

②学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
グループディスカッションのベースとなる「安心して自分の考えを述べることのできる関係性」「和やかな雰囲気」を作るために、毎回のグループディスカッションにおいて、本題に入る前にアイスブレイクの時間を設けた。 グループディスカッションの後、各グループからどのような議論があったのか・疑問が残ったのかについて発表してもらい、全体で共有し学びを深める機会も設けた。 グループディスカッションおよび全体ディスカッションの際には、「自分の考え・自グループの考えと異なる意見が出たら、ぜひワークシートにメモ書きをして、自分（たち）の理解を広げ・深めていきましょう」と声をかけ、皆で集まって学習している意義を理解し、実感できるように工夫した。そして、グループディスカッションにて議論をコーディネートすることに関して、および全体ディスカッションにおいて各グループから代表者が発言することに関しては、「この半期間で必ず１回はリーダーを務め、グループディスカッションをコーディネートしたり、全体ディスカッションの場でメンバーを代表して発表したりしましょう」と伝えている。 グループ編成の方法としては、近くに座る傾向の高い「仲の良い者」同士で組んでもらう回を重ねた後、ランダムに編成して普段話さない学生同士で組んでもらう回を設ける。それにより、「安心」（いつもの気の知れた仲間）を基盤とした「挑戦」（新たな学生との交流）が可能となるとともに、多様な考えとの接触とその良さの実感を実現しようとした。そして、「多様な考えとの接触とその良さの実感」を促進させるため、全体ディスカッションにおいて学生から報告・質問される内容に対して教員は「ぜったいに否定しない。ポジティブなフィードバックを行う」といった入り方で感想を述べたり解説を加えたりした。
・人数によってはディスカッションなどを取り入れると良いと思いました。この授業ではないですが，グローバル共生研究XIIを今年度担当しましたが，えんたくんという円盤型の段ボールを使ったグループディスカッションは好評でした。 https://mk-shiko.net/products/detail/59 おそらく教育学科の永田先生が作成に関わっておられると思います。 ・今年度は基礎課程演習も担当しましたが，学生さんの忙しさはコロナ前よりも格段に上がってるように思いました。課題が多く，課題に追われて過ごしているようで，大学は学ぶ場所なので良いことだとは思いますが，ただただこなすようなことにならないように，授業も工夫する必要があると思いました。
受講人数が想定より少なかったため、学期中に２回の発表（１回目は個人発表、２回目は２人でペアを組んでの発表）を行った。発表は問題なく行えたが、ディスカッションや質疑応答に積極的に参加する学生が少なかった（毎回、２，３名程度）。学生が主体的にディスカッションに取り組めていないのは、そもそもディスカッションの技法を身につけていないためであると思われるので、事前学習として、そのような技法を学ぶ機会を設けることが好ましいと思われる。

②学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について
レポートやプレゼンテーションに関して、他の受講生の評価を義務づけることが、学生の積極的な取り組みへとつながったと思われる（ただし、数名がこの評価作業の意義を理解できずに、評価を実施しないことがあったので、個別に指導した）。
本授業では、講義形式と演習形式の両方をバランスよく取り入れて授業運営を行うように努めた。また、本授業用の Google クラスルームを通じてオンライン上で事前に、予習課題となる文献資料や、前回のリアクションペーパーのまとめや、授業当日の講義用（演習用）レジュメをデータで配布してあらかじめ熟読してきてもらった。そのため、特に演習形式の授業回では、授業当日の教室での教員からの説明を最小限（確認程度）にとどめ、学生には事前に資料を読んできてもらっていることを前提に、グループワークやグループディスカッションに取り組んでもらった（※もちろん講義形式の回には、教員からの説明を行う機会もしっかりと設けてある）。その結果、受講した学生からは、本授業のアンケートの自由記述欄にて、下記の通り、意見をもらった。 ・「毎回オンラインで事前に資料や〔リアクション〕ペーパーが配られるので、とても便利だったし、自分の意見を考える時間を作れました」 ・「グループワークと講義形式の授業両方あり、とても楽しく授業を受講することができた。先生の説明の仕方もとても分かりやすく、授業を受ける前よりも将来教師になりたいという気持ちが強くなった。先生が紹介してくださる文献や資料もとても勉強になり、前期を通して教職に対する考え方が大きく変わった」 ・「様々な現代社会問題と教職という職業についての関係性を、様々な視座から捉えることのできる機会が多くあり、大変刺激になった。また多くのディスカッションの場、他者の意見を聞くことで自身の考えをステップアップできる経験にもなった」 ・「グループワークの時間や、授業最初に前回のコメントペーパーの紹介や説明があるおかげで、違う人の意見を知ったり、新しい気付きを得ることができたりして面白かったです」

③ 学科や大学全体として取り組むべきこと
I think we need better standardized outcomes for our reading and writing programs and more continuity between the first and third-year students.
I have several students in my seminar every year who cannot express themselves in the simplest English, verbally or in writing. It makes seminars difficult because while my focus should be on ideas and content (the reason why most students join) I must spend a lot of time making sure those students simply follow what is going on. I know this is a widespread and recuring problem but I feel like it should be noted, given that it suggests our teaching further downstream needs work. Hopefully we have begun to address this in Academic Reading/Academic Writing
学生のリテラシー能力がだいぶ下がっているので、1、2年での study skills のような授業で基礎力を身につける必要がある。
今年度は換気を徹底しつつの対面授業とのことで教室のドアを開け放して授業を行うことになったが、隣の教室での映像資料の音声や廊下を歩く学生の話し声などがかなり響く時も多々あった。特に演習授業では、各々マスクをつけていることもあって、例年以上に学生の発言が聞き取りにくく難儀することもあった。 各教室へのマイク設置や、演習授業の教室配置の工夫、(難しいかもしれないが) 換気ができるシステムの導入なども検討してもらえると嬉しく思う。
今年の 1 年生はオンライン授業が減った影響か、オンラインの基本ツールが zoom ではなく meet であることを知らなかったり、googleclassroom の使い方がわかっていなかったりしました。このあたりのことは各教員がその都度に説明するのではなく、一年次センターなどが一括して教導していただいたほうが効率的だと思います。
この項では、世界史演習Ⅰ－2（2 年生向け後期）の終了後に、学生とゼミの在り方について意見交換した際のコメントを書く。同演習では 3 回に渡ってアカデミックライティングの訓練を行ったが、それでも作文のトレーニングが足りないとの意見が複数あった。期末課題でレポートを提出することが多いものの、書き方についてのフィードバックがなく、学生は不安と不満を抱えているようである。また、基礎課程演習でライティングのトレーニングをあまり受けていないとの声もあがった。 そこで 1 年生向けに、ライティングの訓練を主目的とする全学的な科目の導入を考えるべきではないだろうか。複数のオーバードクターを雇うことで、専任教員の負担を減らすなら、不可能ではないだろうし、専任はその分、専門的な教育に専念できる。卒論指導でも、文章の手直し作業が減るのではなかろうか。
授業改善に向けた大学全体としての取り組みの活発化。FD など。
オンラインの活用について改めて検討していくことが必要である。双方向性を担保し、資料や説明を工夫し、授業の展開にメリハリを持たせることで効果も出せるように思われる。今後、学生の多様化にも対応できるよう、オンライン授業のノウハウを充実化し、積極的に活用を検討していく必要がある。

③ 学科や大学全体として取り組むべきこと
上記の①でも述べた通り、社会調査スキルの習得は、経験の積み上げが必要である。学科のカリキュラムとして、社会統計学も含めた経験の積み上げができる体制になっているかどうかを、学科全体として検証していく必要があるだろう。 また、全学的にはオンラインの活用について改めて検討していただきたい。オンラインの良さをうまく取り入れながら、教育効果を高める授業運営形態を創造していく上で重要であるとともに、今後、オンライン技術と密接に付き合いながら仕事や生活と向き合っていく学生のスキル向上にも不可欠であると考えられる。運営上の利便性から対面の良さのみが強調されないよう留意する必要があるだろう。
②で記述したように、全体講評や、個別講評の受け付けなども掲示しているため、成績発表後もしばらく Classroom を活用している。授業終了の直後にアーカイブ化するように指示がくるが、学期末（9 月、3 月）まで延期をお願いしたい。 オンラインの授業について、前年度に申請し、教務委員会で検討することになっているが、資料を確認すると、必ずしもオンラインの必然性があるとは思えない授業も認められており、基準があいまいである。特に、教員側の都合（移動時間の負担等）はオンライン継続の理由としては正当とはいえず、あくまでも、教育効果の視点から検討すべきではないだろうか。学生がＰＣやスマホ等を持参することを前提に、対面授業内で Google フォーム等を用いる、チャット形式のソフトを使う、といった工夫は可能で、これらは必ずしもオンラインである必要はない。オンライン授業の基準を明確化することが今後の課題といえる。 Sophie と Classroom の使い分け、機能の改善も課題である。もともと Sophie が使いにくい、わかりにくい、という声は多いが、授業運営においては Classroom がはるかに機能的であるため、教員もこちらを活用するようになり、学生も Sophie を確認する習慣がなくなり、ますます Sophie の確認を怠るようになっている。
授業評価の対象を広げたり、学生として評価の高い科目を挙げてもらうといった形での評価をしてもらうことで、学科や大学全体としての検討材料を得られるようにしてもいいのではないかと思いました。
オンライン授業はもうやめた方が良い。本科目のような大人数の講義形式（知識伝達型）の科目では特に授業効果に限界が生じる。
4 号館 2 階の複数の教室は、グローバル共生研究所管轄から教務課管轄に変えて欲しい。研究所が全学で不足している教室を占有し、大学の本業である正規の授業をする側が研究所にお伺いを立てるというあり方は、主客転倒の感を免れない。許可を得れば使えるというご意見もあろうが、そのような必要も最早ないと考える。もし、すでに移管が完了しているのであれば、ご放念ください。
オンライン授業について今後もその活用を真剣に検討すべき。ただやめるのは時代に逆行。
この授業は、本年度までオンラインで行い、来年度からは対面に戻す予定です。オンラインでの経験を対面に生かす工夫の共有が必要なように思います。

③ 学科や大学全体として取り組むべきこと
大学として急務なのは、学生の間の学力・能力の格差をどうするかであろう。従来どおりの満足のいくレベルの入学者が少なくない一方で、明らかに基礎的な学力・能力が不足している学生、また心理的な困難を抱える学生が増加しており、いっそうの個別的対応が必要になっている。基礎的な能力の差は、たとえば同じ「基礎課程演習」の中で指導を与えることがもはや限界であると言わざるを得ないレベルに達している。これをこのまま放置すると、ますます、不適応者、不登校者、留年者、退学者を増やすことになるだけでなく、能力の高い学生にとっては「無駄なこと」を強いられることになる（「落ちこぼれ」「吹きこぼれ」問題）。たとえば、ICT の活用やプレゼンテーション能力について、高校までですでにかなり習熟しているものもいれば、まったくほとんど何もできないといった場合もある。具体的はなかなか難しいが、授業外での「高校の補習的指導」「セルフラーニングによるフォローアッププログラム」などを用意する、基礎課程演習を差異化する（基礎技能の習熟を目指すコース、学問関心を追求するコースなど）など、様々な方策を取る必要があるように思う。
今年度は、40 番教室のプロジェクタやスクリーンが新調され、比較的明るい室内でも、学生も講義資料を見やすくなり、授業が非常にしやすくなった。教員養成課程における ICT 環境等については、大学として計画的に改善する必要があり、その改善効果がとても大きいと感じた。学生から「履修している人数が多いため、教室が狭く感じた」などの意見もあった。生活科概論は ABC クラスを開講しているが、A クラスへの人数の集中が大きく、上限いっぱいとなっている。
既有知識とスキルという点で授業開始時点から受講生間に差があることを避けられない授業であるため、現在のように「少人数」「複数クラス開講」「授業補助者付き」を継続することが必要な授業である。 可能であれば高度な音楽学習歴をもつ受講生が、将来的に音楽専科教員を希望することも可能になるような、より高度な学習内容に対応した授業の開講も望まれる（現状の開講科目数が多く実現困難であることは承知しているものの）。
１年次生にもう少し目配りができるとよいのではないか。たとえば基礎課程演習の担当教員の所属研究室には、年間を通して出入りできるようにして、副手を介して質問をすることを可能にしたり、研究室からアカデミックアドバイザーに繋いだり、学科の学生と話せる機会をつくったりするとか…。
コロナ禍にあり、学科および全学で学生の学習の質の向上のための取り組みを一生懸命に展開している。今後も引き続きこのような努力を全学的にサポートしていただく体制がありますことを願います。
来年度に関してですが，教室が足りなくて，曜日を変更しました。オンラインでも効果的にできる授業はあると思いますので，もう少しオンラインを増やしてもいいように思いました。

③ 学科や大学全体として取り組むべきこと
本授業のアンケートの自由記述欄に、以下のような記述があった。どちらも初年次生からの回答と思われる。 ・「度々ある、グループワークがとても良いと思います。わたしがとっている授業では基礎課程〔演習〕以外でグループワークのある授業はこの授業だけでした。先輩方と意見交換できるのは、とても有意義な時間で、自分では気づかないような新しい考え方にたくさん出会うことができました」 ・「対面授業でグループワークが多く、先輩方や実際に実習に行った方にもお話をお聞きすることができ、とても今後の学科選択へ役に立ちました」 　⇒この二つのコメントを踏まえつつ、初年次生の受ける授業を全体として見ると、もしかしたら初年次生には、基礎課程演習以外、学生同士（先輩―後輩間を含む）の交流を促進する機会（グループワーク等）が少ないのではないか。グループワーク等は、同じ授業を受講する同年齢および異年齢の学生同士の貴重な交流の機会となり、学問的な刺激はもちろん、後輩学生が先輩学生から学生生活上のアドバイスをもらえるチャンスともなっていると考えられる（事実、上記のアンケート結果には、先輩学生から後輩学生（初年次生）へ、学科選択のアドバイスや、教育実習で経験した内容の世代間継承が行われた形跡が見られる）。今後は、大学全体として、初年次生向けの授業のあり方を再考してみても良いのではないだろうか。
ゲストスピーカーを招聘して、わらべうたの実践を行った。学生が実際に歌い、動くことが想定されたので、この日は 2 号館 3 階の保育ワークショップ室を利用したが（体育館で行うことも検討したが、他の授業で使用していたため使用できなかったため）、テーブルと椅子を端に寄せたものの、29 名が丸くなって行うには、もう少し広いスペースがあると良かったこと と、10 分の休み時間にセッティングするのが慌ただしかったため（授業時間はわらべうたに充てたかった）体育館以外にも広いスペースが使用できると有難いと感じた。
学生から見てよいと思われた授業や、教員が工夫した授業について領域による違いもあるとは思いますが、紹介、共有できるような FD を行っていけるとよいと思いました。前任校の FD で、自身の大学ではなく、オンライン授業の進んだアメリカでのオンライン授業の紹介をしていただいた経験があります。その際には想像を超えた授業の工夫を見せていただき大変刺激を受けました。留学をされたり、海外事情に詳しい先生、あるいはこうした教育方法についての工夫に詳しい先生からお話しいただくこともできるといいと思います。ちなみに、自身が長くかかわってきた医学教育の領域では教育方法が非常に進んでいます。医学系の教育方法についての情報も参考になると思います。
基礎課程演習において、レポートの書き方だけを主に教えているが、テキストの読み方やディスカッションの技法も教えておくことが必要だと思われる。
基礎課程演習の内容は担当教員によってバラツキがあるようなので、たとえば、全学共通のテキストを使用するとか、事前に全員にどのような点に注意して指導すればよいかを徹底することが必要かも知れない。また、最初の 2，3 回の授業を外注してレポートの書き方全般を教え、教員個人は添削に専念するなどが必要であると思われる。

④ アンケート結果（結果について・学生のコメントなど）
I would encourage students to be more open about the activities they both liked and disliked or would like to see more/less of.
I use a mix of presentations, essays and classwork. No particular suggestions – on the contrary, I would welcome suggestions that help students overcome their fear of talking and sharing their ideas.
学生の能力差が著しいと感じられる時は、どの学生にも異なる気配りが求められると感じた。
＜結果について＞ 授業への出席率はきわめて良く、満足度、教員の説明の仕方、教材、授業内の分量、授業運営など、各質問の結果を受け取り、授業を通して伝えたいと考えていたことが伝わったのではないかという感触を得ました。今回の授業の良かった点を、今後の授業でも活かしたいと考えています。 ＜学生のコメント＞ （一部転載します） ・グループワークやプレゼンなど個人が話す機会を適切に与えてくださったので、自身の意見を話しながら他の生徒の意見と比較し様々な観点から考える事ができた。また、映像と原稿を比較をしながら適宜止まって細かく説明してくださったので場面理解をほぼ完璧にできた。 ・ストーリーの概要や着目点を説明された後で実際に作品を視聴できたので、内容をしっかり理解しながら視聴でき、ストーリー展開に関する自分の意見をもちやすかった。 ・習っている内容を細かく毎回解説してくれて、さらに資料もわかりやすくて充実した授業でした。 ・英語をわかりやすく先生が話してくれるので、聞き取り英語が苦手な私でもついていけました。また、とても勉強になる作品だったのでこの授業を受けてよかったと思いました。 ・映画を鑑賞しながら、後半ではたくさんのディスカッションをしたのでより理解が深まる授業の進め方だと思いました。 ・映画から生きる上で必要なことについて学ぶことができました。 ・物語の特徴や詩の重要さを丁寧に教えてくれて、とても分かりやすい授業でした。
二重マスクで声が聞き取りにくいというコメントがあったが、そう指摘されるまで気が付かなかった。
・学生満足度はまずまずであった。到達度の高い学生はかなり満足したと思われる。 ・教科書が高価であるという不満があったが、教員にはどうすることもできない。
扱う題材が日本語でも難しく感じる分野もあり、日本語でのフォローアップが欲しいという声があった。
対面の授業中にアンケートを実施した効果があって回収率 93%だった。満足度は「よくあてはまる」66%、「ある程度あてはまる」29%で合計 95%、「どちらとも言えない」5%だった。

④ アンケート結果（結果について・学生のコメントなど）
・わかりやすく説明はできていたようであるが、さらに高度な内容を知りたい学生への対応も必要だと考えた。
・わかりやすく説明はできていたようである。 ・前期授業では Google Classroom を通じたリアクションペーパーを、後期授業では紙によるリアクションペーパーを使用した。この点について、前期・後期両方の授業を受講していた学生から別の意見が出たのが興味深かった。Google Classroom では後からじっくり考え、振り返って書けるというメリットが、紙によるものではその場の感想を新鮮なまま書けるというメリットが見いだせた。今後、目的に応じて使い分けること考えたい。
７つのコメント、３つのポジティブなコメント、４つのネガティブなコメント、これに対する私からの所見は⑥を参照 （ポジティブなもの） ―自分で英文を訳す時間が十分に貰えたのが良かったです。 ―少し一文が長く感じましたが、やっていくうちに慣れることが出来たので良かったです。 ―英語で書かれた歴史の資料を読んだことは今までなかったため、興味深く、英語の文章を読み解く力も少しついたように感じる。ただ資料がとても面白いものが多かったので、もう少し資料の内容解説があったらより楽しい授業になったと思う。 （ネガティブなもの） －取り扱う文章が難しかった。なじみのない単語が多く登場した －印出先生の態度がやや高圧的に感じられた。記述内容の精査と言うよりは訳文が日本語として適切であるかどうかに焦点が置かれており、またその内容としても重箱の隅をつつくようなものであったと感じる。時代背景の説明があまりなく、充実度の高い内容とは言えなかった。また、英文の事前提示がなく、十分に予習ができなかった。 －生徒が真面目に聞かれたことに対して答えているのに、少し笑ったような態度でいるのが気になりました。 －事前に読んでおく資料が授業時に配布される英文に対して、あまり参考になりません。かなりマニアックな内容なので、ある程度もう少し解像度が上がる資料などが複数あればいいと思います。また、英文の文法の是非も大事だとは感じますが、せっかく歴史の勉強をしているならばその英文をもとに当時の時代背景や暮らしなどの内容をもう少し掘り下げた説明がいただければ良かったかなと思います。
ロールプレイングについて、前回は非常に好評だったが、今回は人前でセリフを言うことに抵抗を感じる学生もおり、選択制にしてほしい、との意見も出ていた。習熟度の差についても、特に優秀な学生は敏感に感じ取っており、プレゼンの準備が十分できていない人がいるが、完全に準備のできた状態で授業に臨んでほしい、という意見もあった。こうした問題を鑑賞するには、②の項で書いたようにコース分けを行い、習熟度に応じた指導を行う必要があるのではないか。

④ アンケート結果（結果について・学生のコメントなど）
Q４　総合的に見てこの授業に満足した：「良くあてはまる」100%（7 名） Q６　教員の説明の仕方、話し方は分かりやすかった：「良くあてはまる」100%（7 名） Q８　毎回の授業内容の分量や速度は適切だった：「良くあてはまる」71%　（5 名） 「ある程度あてはまる」29%　（2 名） Q９　教員の授業運営は適切かつ公平だった：「良くあてはまる」86%　（6 名） 「ある程度あてはまる」14%　（1 名） 回答は 4 ないしは 5 に集中しており、評価は概ね良好であった。Q10 では、解説のわかりやすさを評価するコメントと、テーマの背景であるオランダ社会に関する説明を評価するコメントがあった。
・授業自体についてではないが、アンケートにゼミ生同士の交流がもっとほしかったという意見が出された。コロナ禍前には実施していたゼミの食事会がしばらくできていないことも大きいと感じた。新年度は授業内でもふだん話す機会のないゼミ生と共同で取り組むような作業をもりこみたい。 ・グループワークで、毎回役割をかえて、全員が司会から創作まですべての役割をこなすようにした。テクストを読むという課題は同じだが、グループ内での役割が毎週変わることが新鮮で興味が持続したという学生の声があった。特に、作品テクストを元にして、自由に視覚化した作品を創るという役割は、それぞれの個性が出て、授業を活気づけるのに役立ったので、今後も続けたい。
アンケート結果では、おおむね好評であった。自由選択科目で、もともと関心のある学生が受講していたことが大きい。受講生の過半数が 1 年次生であるが、理論を社会現象に応用した事例として構成していることが、最初のハードルを下げ、興味関心を持続できたと考えられる。また、社会心理学は高校までには該当する科目がない学問分野であるが、こうした授業を 1 年生にも開くことで、社会心理学という学問のおもしろさを伝え、学科の広報としても機能している。
授業評価とは別に、各回の授業に関しての理解度について回答させているが、数学的な根拠を示す内容になると理解度は低下する傾向がある。最後の方は試験も念頭に、模擬試験等を通して理解が不十分な個所を学生が自覚できるようにし、また、理解度が低い内容については改めて説明を実施している。こうした取り組みは評価されており、結果として、多くの学生が及第点を得ている。ただ、一部の学生は授業内に十分ついていくことができない実態もあり、個別的な対応が必要かもしれない。
2020 年度からオンライン形式に切り替え、試行錯誤しながら授業を進めてきた。こうした取り組みを、学生がどう評価をしているのかを今回検証した。総合的に見て、この授業に満足したかという問いに対しては、83%が「よく当てはまる」、17%が「ある程度あてはまる」と回答しており、授業評価に回答した全員が一定の満足感を得ていた。自由記述を見ると、特に「説明の仕方、提示される資料が分かりやすい」「毎回のフィードバックで、他の人の意見がきけてよかった」などが挙げられていた。

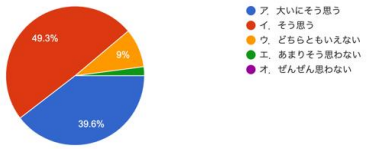
④ アンケート結果（結果について・学生のコメントなど）
とくに学生のコメントは寄せられていないが、授業中の発言が活発であり、その表情や授業外でのメッセージのやりとりをみていても、少人数ゼミへの満足度は非常に高い。ゼミ受講生数が 13 人、15 人となると、発言機会も減り遠慮がちなゼミ参加となるので、少数ゼミを維持したい。
概ね好評。
・授業の前半には受講者での意見交換があり、自身の考えが深まりました。実際に NGO の活動をされている経験を活かしての授業題材やビデオを取り入れて行われました。教科書やテキストだけでないことからも多く学ぶことができた授業でした。受講して良かったです。 ・授業ごとに配布される資料は、毎回の授業内容がグラフやイラストが入ってまとめられていたため、理解しやすく感じ、良かったと思います。 ・グループディスカッションが多く良かったです。授業のスライドをもう少し早めに頂きたかったです。 ・環境問題を多角的な視点から学ぶことが出来るという点が良かったです。 ・今までどこでも習ったことがなかった深い内容を学ぶことが出来て良かった。改善すべき内容として、なるべく授業時間通りに始まり、授業時間通りに終わって欲しい。 回収率は 40%ですが、満足度は、「よくあてはまる」29%、「ある程度あてはまる」が 57%で、合計 86% 説明の仕方、話し方については、「よくあてはまる」36%、「ある程度あてはまる」29%で、合計 65% 授業中に使う教材は学習の役に立ったかについては、「よくあてはまる」43%、「ある程度当てはまる」43%で、合計 86% 授業の分量や速度は適切だった「よくあてはまる」36%、「ある程度あてはまる」57%で、合計 93%になる。 今回が私は初めてなので、経年変化は不明ですし、他の授業との相対的な評価はできなかった。また、パワーポイントを事前に示して欲しいとの要望もあったが、時と場合によって好ましくない場合もあるので、要検討です。
アンケートでは「毎回授業内容に関する論文を探し、お互いに発表したため多角的に学ぶことができた点が良かったと思います」というコメントがあり、効果的にアクティブラーニングと反転授業を実施できた。学生の出席状況や満足度、取り組み状況も大変良い状況であった。
授業内容が「毎回完結型でわかりやすい」、また毎回の授業の最後に問を設けて記述課題に取り組む時間をとっているため、「その場での振り返りを行うことができ、課題を後に残さず質問もその場でできるので良かった」というコメントがあった。
概ね良好であった。
総合満足度（４＋５）は 100%ではあったが回答率が低かったので全体像がわからず残念。

④ アンケート結果（結果について・学生のコメントなど）

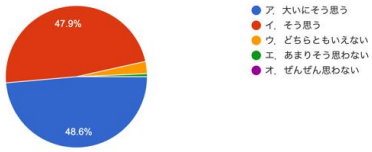
出席率は総じて良好であり、予復習の時間は 2 時間以上が 3 名、1～2 時間が 7 名、それ以下が 6 名。Q4 以降の回答は 5 と 4 のみで、概ね良好であった。学生のコメントは、「予習段階で考えていたことが、授業での対話を通して変化していった」、「他の学生の意見をさまざま聞くことができて、視野を広げられた」という趣旨の意見が目立った。

前期

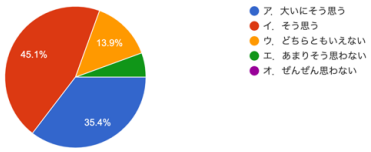
①キリスト教への関心が深まった。
144 件の回答



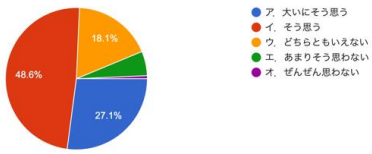
②キリスト教への理解や知識が増えた。
144 件の回答



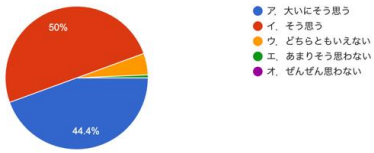
③主の祈りなどを祈る姿勢や態度が身についてきた。
144 件の回答



④神の存在について考えるようになった。
144 件の回答

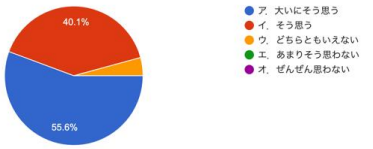


⑤授業に真面目に取り組むことができた。
144 件の回答

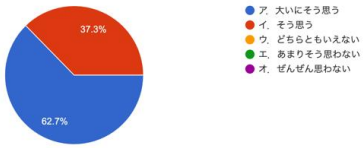


後期

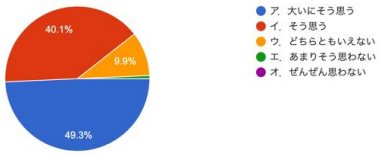
①キリスト教への関心が深まった。
142 件の回答



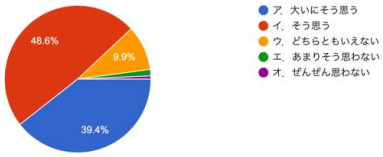
②キリスト教への理解や知識が増えた。
142 件の回答



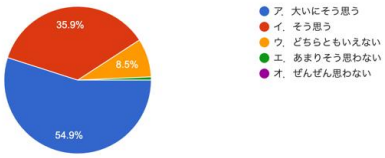
③主の祈りなどを祈る姿勢や態度が身についてきた。
142 件の回答



④神の存在について考えるようになった。
142 件の回答



⑤授業に真面目に取り組むことができた。
142 件の回答



自由記述蘭に授業内容の説明不足に対してコメントがあった。率直にあらためたい。

④ アンケート結果（結果について・学生のコメントなど）
・演習にしては履修者数が多く、学生一人の発表回数が想定していた回数よりも少なくなってしまった。アンケートの事由記述蘭に発表者の欠席について指摘があったとおり、緊張感を保ちにくい状況にあった。今後は、履修者の参加を促す工夫を授業担当者として図っていきたい。
演習の趣旨を理解した上で履修登録した学生ばかりで、アンケート結果は良好だった。
①授業に関する調査結果 「よくあてはまるの」の数値は、「受講前からこの授業の内容に興味・関心があった」(81%)、「総合的にみて、この授業に満足した」(100%)、「シラバスの記載内容は、この授業を受講する上で役に立った」(81%)、「教員の説明の仕方、話し方は分かり易かった」(100%)、「授業中に使う教材は学習の役に立った」(100%)、「毎回の授業内容の分量や速度は適切だった」(75%)、「教員の授業運営は適切かつ公平だった」(100%) であった。「授業への出席率」について、「よくあてはまる」と「ある程度あてはまる」で (100%) であった。 　課題としては、「授業のために平均何時間程度、予習・復習をしましたか」については、事例研究をまとめる時間や発表をするために資料を作成する時間は授業外で取っているものの、本やインターネットで調べるなどに関しては「ある程度あてはまる」(19%)、「どちらともいえない」(38%) という数値であり、さらに発展させて実践研究の先行研究などと結びつける時間を設定できるように工夫する必要があると思われた。 ②授業に対する学生の意見 ・施設実習と通して、社会的養護Ⅰ・Ⅱと、様々なことを学び、実践し、事例を考察しと１年間を通して、社会的養護に関する学びを深めることができました。だからこそ、今まで学んだことを忘れずにこれらを心に留めて良い保育者になりたいと思いました。 ・実践的に学ぶものが多かったり、学生同士の事例を聞くことができたので分かりやすく学ぶことができました。 ・施設実習に向けて、全授業を通して丁寧な指導をしていただいたと感じています。 ・事例についてとてもじっくりと話し合い、様々な意見に触れることができたので、思慮が深まり、とてもよく考えられました。前期・後期と通年だったので、とても印象深く学び深い授業でした。 ・グループディスカッションが多く、自分で考えて学ぶことが出来た。 ・それぞれの実習経験を共有し、事例として様々な子どもたちの様子を考察することが出来て勉強になりました。 ・施設実習の授業と関連していて、実習後の事例研究があったため、より深い学びに繋がったと思います。 ・ディスカッションが多く、深い学びと繋がった。
予習、復習の時間を持たせることが、実質的に難しい。チェック方法などの工夫の余地はあるが、学生からすれば様々な授業を受けているわけで、全部の予復習をこなすことは、現実的に困難であろう。

④ アンケート結果（結果について・学生のコメントなど）
記述式アンケートで数量的な結果は示せないが、回答中の記述を以下に記す。 ・授業はとても楽しかったです。初めは音楽についての知識が全然わからなくて心配しましたが先生はいつも支援してとても感動しました。授業を通じて楽譜を少し読めるようになって簡単な曲が弾けるようになったのでとても嬉しかったです。 ・ピアノのレッスンに落ち込み、何度も休もうと思いました。他の受講生との差や本番に弱い自分にすごく悩みました。毎回出席できたのは、他の受講生の方が自分と同じように昼休みを削って一緒に音楽室で練習していたからだと思います。 ・コード名を覚えるのが本当に大変でした。コードの導入を習った次の授業では和音まで理解していることが前提にされており、少し戸惑いました。
総合的にみてこの授業に満足したかについて、よくあてはまるが 52%、ある程度あてはまるが 35%であり、肯定的な回答は約 9 割でした。ただし、どちらともいえないあるいは当てはまらないとしたものが 1 割強あり、彼らの満足度をより高くする点で工夫の余地が認められました。 受講前からのこの授業に対する興味・関心があったかについて、よくあてはまるが 35%、ある程度あてはまるが 46 %で、合わせて 81%でした。このようなテーマに関する関心の高さがあり、今後も授業の内容の充実に努めたいと考えます。対面で行っていた時には、子宮頸がん経験者をゲストに呼び話をしてもらうとともに質疑の時間を設けるといった取り組みを行ったが、オンラインも活用しながらの工夫もあってもよかったと反省しています。 教員の説明の仕方、話し方のわかりやすさについて、よくあてはまるが 58%、ある程度あてはまるが 34%と肯定的な回答が 9 割を超えており、高い評価が得られてました。授業中に使う教材は学習の役に立ったかについて、よくあてはまるが 57%、ある程度あてはまるが 37%であり、これも高い評価が得られています。る自由記述でも授業のわかりやすさと新たな知識の獲得、そして教材の利用可能性についての評価が高かったのですが、その一方で、主体的に取り組むようにうながした期末の課題レポート作成が負担に感じたという自由記述もあり、このあたりの工夫が必要と思われます。 授業内容の分量や速度については、よくあてはまるが 61%、ある程度あてはまるが 30%と約 9 割であり、大人数でのオンライン授業に私のほうも慣れてきたといえるように思います。 教員の授業運営の適切さと公正さについて、よくあてはまるが 70%、ある程度あてはまるが 27%と、肯定的な回答が 10 割に近く高い評価を得ました。ただし、この授業では、これまで予習や復習を積極的に求めておらず、予習や復習の時間が不十分な結果が続いています。この点受講人数も多く、悩ましいところなのですが、検討を継続したいと考えています。
グループワークで自分以外の他者の視点に触れることができ、自信の考えを広げることができたという感想が多く見られた。また、授業において具体的な事例や動画を基に考えるワークを多く取り入れていたことや、各自が「自分の考え」をもって討議に参加できるよう、自身の気づきや考えをメモするワークシートを用意したり、考えをまとめる時間を設けたことにより、「当事者意識をもって授業に臨むことができた」「自主的に考えることができた」等のコメントも多く見られた。

④ アンケート結果（結果について・学生のコメントなど）
本授業のアンケート結果として、主なものは以下。 ・Q4「総合的にみて、この授業に満足した」：5 が 95% ・Q6「教員の説明の仕方、話し方はわかりやすかった」：5 が 95% ・Q7「授業中に使う教材（テキスト・配布資料・映像など）は学習の役に立った」：5 が 100% ・Q8「毎回の授業内容の分量や速度は適切だった」：5 が 90% ・Q9「教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった」：5 が 95%
＊ゼミでは先生及び他のゼミ生と共に、しっかりと卒業論文を書き終えることができたと思います。貸していただいた書籍類も有効に使うことができ、先生の助言も合わせて、楽しく学びの集大成を締めくくることができました。本当に感謝しております。 ＊学んだこと～ゼミの担当の先生は、必ずしも卒論テーマにとても寄り添っていなくても、丁寧に最後まで指導していただけるということ。 改善点～3 年の後期からの一年半の授業でしたが、ゼミ感というのは、コロナでオンラインだったこともあり、卒論提出日間際らへんで集まってようやく実感できました。 その割には仲の良いゼミ同期となりましたが、もう少しみんなで集まる活動を取り入れても良いかと思いました。クリスマス会はとても楽しかったです。1 年半改めてありがとうございました。 ＊私は、この 2 年間先生のゼミ、とても充実していました。中々全員で集まることは難しかったですが、週 1 で集まる 5 限の時間は皆と卒論のみならず、進路や授業のことなど色々話せる時間で楽しかったです。 私は、参考資料や文章の添削など的確なアドバイスを頂き、今後の仕事でも活かせるようなことをたくさん学ぶことができました。 今回は、コロナの流行に伴い、対面の機会を中々設けることができなかったですが、やはり、オンラインよりもしっかりと対面の方がコミュニケーションもとりやすいのでははないかと思います。 夏休みに行う、一日中卒論を行う日を二日間ではなく、可能な限りもっと多く取ってもよいと思います。（私は強制的な環境があった方が進むからです。） ＊本当に今までお世話になりました！ このゼミを通して今まであまり関わりのなかったゼミ生と出会え、私は先生のゼミでよかったです。
比較的評価は良かったですが、次年度は対面になるので、より学生が主体的に取り組める工夫をしようと思います。
回収率が 30%程度と少ないのは、授業が終わったあとに評価しても何ら改善のメリットを自分たちが得ることがないためだと推察できる。したがって、授業期間の真ん中あたりに、授業評価を行い、即時フィードバックを行えば、回収率が上がるのではないかと思われる。

④ アンケート結果（結果について・学生のコメントなど）
回収率が 33%と少ないのは、前期末に数多くの授業評価があるために、学生にとって負担になっているのかもしれない。また、授業が終わったあとに評価しても何ら改善のメリットを自分たちが得ることがないためだとも推察できる。したがって、授業期間の真ん中あたりに、授業評価を行い、即時フィードバックを行えば、回収率が上がるのではないかと思われる。
【「授業に関する調査」に見られる成果】 Q4：総合的にみてこの授業に満足した。「5：よくあてはまる」16 名（59%）、「4：あてはまる」11 名（41%） Q9：教員の授業運営（質問や発言の十分な機会、私語の注意など）は適切かつ公正だった。「5：よくあてはまる」21 名（78%）、「4：あてはまる」6 名（22%） Q10：この授業の良かった点、あるいは改善すべき点は何ですか。また、設備教室等に関して何か意見や感想がありますか。この授業の改善につながるような建設的な意見を書いてください。 ・ビデオなどの教材があることで、年齢ごとの子どもを捉えるための材料になった。その後、計画を立てる際にもその時に見た様子やテキスト内の事例を活用することができた。 ・先生の事例やビデオを通して学べたり、ディスカッションができたりしたのが良かった。 ・先生の体験談が詳しく聞けたのでよかったです。 ・みんなでディスカッションする時間が多くて、みんなの意見や考え方からも学べることが多くてとても良かったです。 ・先生のお話をたくさんしていただき、先生の今まで経験してきたことをたくさん聞くことができて自分もその世界に入らせてもらうことができました。子どもたちと早く関わりたいと毎回毎回の講義で思わせてくれる講義でした。先生の 1 つ 1 つの言葉選びや姿勢がとても好きでした。杉原先生ありがとうございました。 ・丁寧に指導してくださいました。 ・クラスのメンバーと意見を共有する時間が多くあり、様々な意見に触れる機会となりました。 ・先生がとても優しかったです。 ・授業のスピードを私たちに合わせてくださり、とても受講しやすく、内容もとても面白いことやこれこらの学びに役立つものばかりでした。ありがとうございました。 ・指導計画を立てる授業が特にためになった。 ・予習で自分の意見を用意し、授業で話し合いをすることで違った視点を得たり学びの幅が広げられたりしたと思います。
「学びたいと思っていたことがしっかり学べた」「体験談を間に入れることで，想像ができ，身近に感じ，理解度が高まることが良い点である」「私の親・祖父母の介護や老後，自分の老後にも必要な知識を学べる授業だったと思います。」などのコメントがあり，超高齢社会の中で生きていく我々にとって必要なことをお伝えできたように思っています。
少人数で質問や意見交換が行いやすかった。
リアクションペーパーを書いてもらう時間を十分に取る配慮が必要だと感じました。

④ アンケート結果（結果について・学生のコメントなど）
実習を組み込んだことで学生の満足度が高く、「総合的にみてこの授業に満足した」は「よくあてはまる」と回答した割合が 92%であった。自由記述にも実習に関する具体的な内容が多く、「実践的な内容が多かったため、とても楽しく、理解しやすい内容だった」「体験を通して学ぶ機会が多くあり、とても深い学びになりました」などの感想が得られ、実習による体験を通して学ぶことの効果が大きいことが示された。ただし、「私語を注意してほしかった」、「グループ活動で全く何もしない人がいたので確認してほしかった」、とのコメントが自由記述により得られため、実習をグループで行うときには特に、注意をしながら進めていく必要がある。 配布資料を Google ドライブにも共有していたことが好評であり、「Google　Drive に授業資料や補足資料が提示してあったことも、後から復習がしやすく、とても良かった」との意見があった。教員としても、すべてを印刷せずに、重要な資料や授業中に書き込むとわかりやすいものについては印刷し、それ以外の文献や参考資料はドライブのみに掲載するなど、使い分けることもできたので、便利であった。 また、毎回の授業後にふりかえりシートを記入しフィードバックし、授業の最後には何を半期で学んだのか、各自が一覧できるように工夫していたが、「毎授業後、ふりかえりシートを記入する時間があり、その回に学んだことを記録できて、後から見返すこともできてよかった」との意見が得られた。
５名の回答者全員が総合的な満足度で「よくあてはある」を選択し，うち２名よりこの授業の良かった点として以下のコメントが得られた。今後も適切な課題設定・環境作りを心がけたい。 ・発表を通して自然と卒論に向けての興味の方向を定めることができ、他の学生とも楽しく交流しながら学ぶことができたためとても良かったです。 ・活発な意見交換ができる環境であったこと。
・教員の経験をもとに伝えていくことに対しては概して評価が高かったと思います。理屈だけではなく、その場の状況が想像できることで、他人事ではない者として考えられる工夫は今後も大切にしたいと思いました。 ・毎回、前の授業を受けての振り返りを課しており、その中で多かった質問や感想についてコメントを付けて返していました。これについては授業の中でも自分以外の人の考え方が分かり役立ったと答えていた学生が多かった一方、自身のコメントや質問に対して答えてもらえず「不愉快」というコメントがありました。すべての学生にこたえることはむつかしく、この点についての対応はどういう視点でコメントを出すかも含めて学生と共有していく必要を感じました。 ・対面授業でしたが、資料はアップしていたため、実際には出席をせずにクラスルームにアップされた資料を見て課題を提出している学生について不満を持っている学生がいたようでした。授業に参加せずに課題を提出する学生がいた際に、出席した学生が「損をした」ではなく。出席したことで学びが深まったと思えるための工夫を考えたいと思います。

⑤ 授業評価についての意見、提言など
教員が教室から退室した後、授業時間内にアンケート調査の時間を確保したことで、高い回収率（95%）につながったのではないかと思います。
昨年と同様 Google Form での提出となったが、やはり回答率が低かった。提出方法について引き続き検討が必要であろう。
今回は人数の少ない授業での実施だったせいか回収率は高かったが、記述部分が非常に少なかったのが残念だった。 調査結果には「登録者数」と「回収枚数」から「回収率」を割り出しており、授業内に調査を行った場合、実際の授業出席者との数字と一致していないため、回収率は必ずしも正確ではない。
今回、授業評価アンケートの回収率が 63%で、経験した中で最低だった。オンライン授業で繰り返し呼びかけ、チャットにリンクを貼っても回答しない学生が、過去 2 年間のオンライン授業に比べて増えた。学生側に「アンケート慣れ･飽き」があるのだろう。回答率を上げるには、対面授業の教室で回答時間を用意するのが最も確実だと思う。
オンラインでの授業評価の継続を希望します。
この形式であれば、Google フォームで実施した方が、集計作業が簡便・迅速ではないだろうか。学科内では、ここまで雛型ファイルが用意されていても、複数科目を 1 ファイルにまとめたり、pdf に変換していたり、①～④の自由記述は設問を削除して回答だけを記述したり、設問を残したり、ファイル名も元ファイルのままだったり、個人名を入れたり、授業名を入れたりと、教員ごとに仕様がバラバラで、提出用にファイル名を統一する作業などが生じている。また、事務方がここから回答を一つ一つ拾って集計するのも、効率的ではない。 現在では、将来構想委員が学科の授業報告書をとりまとめ、それに基づいて学科の報告書を作成することになっているため、各教員が提出したものを将来構想委員が閲覧可能にする必要はあるが、フォームでの提出をご検討いただきたい。
回収率を上げる工夫が必要かと思います。
大学全体としての平均水準や学科の平均水準があったり、どれかをセレクトするというよりも、基本的に評価を行うようにしていくことで、全体的な傾向も掴めるかもしれません。他の非常勤を行なっていた大学では、それらもあったので、相対的な評価が可能でした。 ここの授業の評価もいいと思いますが、学生にとって、面白かったとか、役に立ったといった科目名を学生に聞いてみるというのもいいのではないでしょうか？
授業評価をおこなった結果、学科ごとに取りまとめられたものがどのような形でその後の授業改善や大学広報などに反映されるかを教えていただきたい。

⑤ 授業評価についての意見、提言など
来年度から演習（そして全学共通科目のキリスト教学）がすべて半期化される哲学科では、授業評価をどの段階ですべきか考えておく必要がある。通年科目だった科目は、前期・後期を連続して受講するよう推奨する予定だが、後期末に後期分だけの授業調査をすることになるのか、またアンケートの質問の文言がそれらの変化に対応できているか、確認の必要があるように思われる。
上記学生の感想に関しては、授業時間外の学習と練習が不足しないようなサポートが必要であったと考えるが、開講期間中にこうした声を拾えるシステムを（毎回の Google フォームによるリアペなどによって）授業者個人が整えておく必要性を感じた。少ない回数で多くの内容を学習しなければならない授業なので、前時の学習は次の時間には定着していることが前提であるということを、学生自身が受講の心構えとして持っていてほしかった。全学的に、授業時間外の学習の習慣を持つべきという方向性で学生をエンカレッジし続ける必要性を感じる。
特にございません。「『授業に関する調査』結果」の資料を全学的に電子データとして配布する（現況は印刷し紙の資料を配布）と、配布側も受け取り側も業務負担が少なくなるかなとは思います。
自由記述欄など、丁寧に学生からのフィードバックがあり、大変参考になった。
授業評価を適切に実施しそれを教員や大学の取り組みに本気で活かすのであれば，学生が授業評価を回答する上でのインセンティブを設け，回答（回収）率を高めるとともに，それを適切にフィードバックする機構が必要と思います。グッドティーチャー賞はよい取り組みと思いますが，このような顕彰を積極的に実施する（教授会で表彰するだけでなく，学内外に積極的に広報する）ことで，教員が自身の教育方法をより改善していくモチベーションを高められるのではないでしょうか。
授業評価の提出が本授業の場合約半数でしたが、とても授業に満足した学生と、逆に授業に不満を持った学生が提出しているものと思います。全員が提出した方が全体の様子は分かると思いますが、ある意味、今回提出されたものが、満足と不満を持った学生の意見と理解できると思います。 授業評価は、学生自身にとって役立つものなのだという理解を学生に周知して行くことが肝要かと思います。

⑥ その他
ある程度日本語、日本文学に対する興味のある学生が受講しているのだろうと思うのですが、日本語日本文学科への進学希望は 3 名に留まりました(昨年は 8 人でしたか･･･)。ということは、この授業で日本語日本文学の魅力を十分伝えられなかった、ということになり、反省すべき点です。とはいえ、全員が日本語日本文学に興味を持っているわけではありませんし、どこまで専門性を掘り下げて授業をすべきか(演習における研究発表の方法も学問分野によって結構違いがあるはずです)悩ましいところです。一年次センターで、授業についてのノウハウを話し合う機会を作って下さっていますが、改めて、大学で学ぶことへの入門教育と、専門教育をどうバランスを取っていくか、全学的に考える必要があるのではないか、と思います。次年度から、全学科で入門授業を開講するわけですし。
大学の授業は高度なことを扱うべきだと考える。難しい内容をわかりやすく説明することに意を注ぐのが本来であり、内容のレベルを安易に下げるのは望ましくない。学生には初回に授業の目的と合わせてそのことを伝えた。配布資料と説明のわかりやすさに留意し、一定程度、実現できたと思われるので、今後もこの方針で取り組んでいきたい。
授業時に ICT ツールを活用しているため、Wifi につながらない／つながりにくい状況になるととても困ります。来年度はこういった状況にならないようお願いしたいです。
オンラインで授業を行ったが、受講生のなかには出席をせずに課題だけ出していたり、授業が終わっても呼びかけに反応せず退室しないなど、受講態度に問題がある学生が複数名いた 。そのため、対面での授業の運営のしやすさを痛感した。
本授業ではないが、別のオンライン授業において、受講生の授業中の取り組みの努力を評価するために毎回の授業後にノートを提出させ、それをもとに平常点の評価を行った（この方法は、ポートフォリオ評価を参考にした）。ノートの中には、授業スライドの内容だけでなく、学生が授業でどのようなことを考え、疑問に思ったか等を丁寧に書き込んだものも見られた。加えて、ノートの書き込みの量と質より、学生の努力の痕跡を視覚的に捉えやすく、客観的な評価がしやすい方法であった。また、ノートから教える側としても学ぶことや気づくことが多かった。
「授業に関する調査」の結果によれば、この授業に満足したと評価した学生（評価 4・5）が、回答者の 88%を占め、担当者の感触や期末レポートの内容に鑑みても、一定の充実度は達成できたと感じている。また、Google Drive 等を活用して、講義資料や関連文献のリスト等を配布する際、講義時間より前に余裕を持ってアップロードするよう努めることに加えて、フォルダ分けやファイル名を工夫し、学生がファイルを整理しやすいように配慮した。これについては、受講者にも好評のようなので、他科目も含めて、今後も継続したい。 他方で、予め用意した講義内容を消化することを優先しがちで、やや単調な講義になる傾向があったと感じている。授業内で学生に発言を求めることは毎回行ったものの、非常に限られた時間・回数であったことは否めない。また、授業時間外での学習（予習・復習）の機会をあまり作ることができなかった。授業時間外の自主学習と教室での講義を効果的に組み合わせる工夫は、今後の課題として検討していきたい。

⑥ その他
【授業のやり方とねらい】　　講読の授業としては、少し変わった方法を取っている。ヨーロッパ中世に関する様々な話題に関し、日本語で解説したプリントを事前に Classroom で配布し、読んでおくことを求める。授業当日にそのテーマの短い英文を配布し、前半を費やしてその場で訳文を作成してもらい、後半で答え合わせをする。各自が自分の答案を点検したうえで翌週までに訂正した訳文を Classroom に提出する。これを添削し、理解が不十分なものには再提出を求める。これを毎回繰り返す。 歴史学の研究においては、外国語文献は自分が「ある程度知っている」内容の理解をさらに進めるために読むのであり、用語も既知の術語を当てはめればよい。また複雑と思われる文法の知識も、内容を正確に把握するために役立てられる。およそそうした事柄を実際に体験してもらうことがねらいであった。 【達成度】 　まず、統計数字から引けば、回答者１３名中 Ｑ４　総合的に見てこの授業に満足した： 「良くあてはまる」「ある程度あてはまる」　　７０％（９名） 「どちらとも言えない」「あまり当てはまらない」３０％（４名） Ｑ６　教員の説明の仕方、話し方は分かりやすかった： 「良くあてはまる」「ある程度あてはまる」　　３８％（５名） 「どちらとも言えない」「あまり当てはまらない」５３％（７名） 「まったく当てはまらない」　　８％（１名） Ｑ８　毎回の授業内容の分量や速度は適切だった： 「良くあてはまる」「ある程度あてはまる」　　７７％（１０名） 「どちらとも言えない」「あまり当てはまらない」２３％（３名） Ｑ９　教員の授業運営は適切かつ公平だった： 「良くあてはまる」「ある程度あてはまる」　　６９％（９名） 「どちらとも言えない」「あまり当てはまらない」３１％（４名） ざっくり言って、７割程度の受講者が肯定的に、しかし３割程度が批判的に評価していると言える。 自由記述の中にも、こちらのねらいを理解したものがある一方で、手厳しい批判的意見もある。 【今後の改善点】 全体として、アプローチを緩やかにするということだろうか。 具体的には、もう少し平易な内容の資料、テキストを適度に織り交ぜ、かつ歴史的説明ならびに文法的解説を今までより懇切に行うことにしたい。授業時間には余裕があるので、こうした改善は可能であると思う。
来年度からは対面授業になるが、オンラインで外国語、とりわけ第二外国語の授業は非常に難しい。

⑥ その他
コロナ禍で、オンラインを中心とした授業を多く履修してきたこともあってか、授業を通して、教員との関係性を築くことに困難を感じている学生が見受けられる。こうした学生に対しては、教員の側からの積極的な働きかけ、特に個別面談の機会などを適宜設ける必要性があると思われる。
その学びを更に深めていく。本授業では、社会的養護について実践的に学ぶため、社会的養護における保育者の支援の実際について、事例をもとに専門職としての具体的な支援について学ぶことを目的としている。 ・授業概要と学生の到達目標は、以下の通り（5 項目）である。 ① 児童虐待などの問題がおきる背景や原因について理解する。 ②様々な福祉ニーズをもつ子どもや家庭に対して、どのような対応が必要であるのかを具体的に学ぶ。 ③暴力からの回復（施設内虐待の問題・DV 経験からの回復）について理解する。 ④子どもたちの自立支援について具体的に学ぶ。 特に施設実習で実際に経験した事例を中心に学びを深めるため、学生の事例発表と共にディスカッションの時間を多く設けた。専門職としての具体的な支援について議論する機会を設けた。達成度について、学生には積極的な学習への態度・討議への参加を望んだ。また、学生同士、理解している点、理解できてない部分、実習で苦慮した支援、試みた支援を具体的に発表して、お互いに苦手な部分や得意な部分、工夫した部分を共有することが出来るように設定して経験値を増やすようにと助言した。 ・達成度（結果） 自分の事例研究で何を明らかにしたいかについて、具体的に学び、それを発表することにより、他の学生が何に着目をして、社会的養護を理解し、子どもへの支援に取り組もうとしているかが分かり、支援についてどのように組み立てることが必要であるのか、どのような配慮や工夫が支援の中で求められるのか、子ども理解・家族理解についても学びを深めたようである。
授業の導入に必ず１０分程度のアイスブレークを入れて、講義の本題へといざなう工夫をした。毎週、授業の前の週の金曜に Sophie で簡単に取り組める課題を共有し、授業の初めに回答例などを分かち合うようなリズムを作り、特にコロナ禍においては有効であると思われた。また、上記の通り、「正答のない問い」を中心に進めた授業であった。比較的に大人数の教室ではこうした問いを定期的に提示することによって、さらにリアクション・ペーパーを関連づけて活かすことによって、履修生の主体性をある程度は引き出すことができると実感した授業であった。外部講師にもそうした授業の流れを伝えることによって特別講義を活かすことができると言えよう。ただ、最後の授業でとったアンケートで、「今までの自分の思考を転換できる授業でした。」という感想があった一方で、「毎回のリアクションペーパーが私にとっては少し大変だった」という感想もあり、一部の学生にとってはやや負担感の多いクラスであったのかもしれない。コロナ禍という特別な状況を考えると、さらに工夫すべきところはあるのではないかと考えている。

⑥ その他
教務課の方へのお願い。本授業（前期「教職入門Ⅱ」）に関して、学生アンケートの自由記述欄に、「教室の構造の問題になってしまいますが、教室が階段状になっていたり、机同士の間が狭かったので、グループワーク時などの移動が大変でした」との意見が寄せられたので、来年度は、ぜひご配慮いただきたいです。

第３章　学科・専攻による授業報告書

学生による授業評価の結果をフィードバック後、各教員は自身の授業を振り返り、その成果や課題等を「授業報告書」として提出するが、これらを学科レベルで取りまとめ、学科・専攻コースの授業報告を作成する。以降は各学科の報告である。

英語文化コミュニケーション学科

１．授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

目標はある程度達成できたとの回答が大多数であった。

２．目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など
（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

パワーポイント、ICT ツールの活用、プリント、参考文献、プレゼンテーション、グループディスカッション、授業中の課題、小テスト、
その他の項目として、ロックダウン明けの学生との学外への散歩を含めた交流、提出期限を設定しての提出物、グループワークで、毎回学生の役割をかえ、グループ内での役割が毎週変わることが新鮮で興味が持続したという学生の声があり、授業を活気づけるのに役立ったとの回答があった。

３．今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

発言を求められても意見を言えない学生がおり、苦慮している。
Academic Reading/Academic Writing の合同会議で話し合う問題である。

４．学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

学生のリテラシー能力がだいぶ下がっているので、１、２年での study skills のような授業で基礎力をしっかり身につける必要がある。

５．授業評価に関する感想、要望

- 二重マスクで声が聞き取りにくいというコメントがあったが、そう指摘されるまで気付かなかった。
- メディアルーム E 教室のビデオの音量がいつも低かった。
- 教員が教室から退室した後、授業時間内にアンケート調査の時間を確保したことで、高い回収率（95%）につながった。/ Google Form での提出は回収率が低かったので、提出方法について引き続き検討が必要。
- 到達度の高い学生はかなり満足したと思われる。
- 記述部分が非常に少なかったのが残念であった。

- 調査結果には「登録者数」と「回収枚数」から「回収率」を割り出しており、授業内に調査を行った場合、実際の授業出席者との数字と一致していないため、回収率は必ずしも正確ではない。

日本語日本文学科

1．授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

・多くの授業で授業目標を「ある程度達成できた」。

・学生は基本的に興味を持って熱心に取り組んでいる。今年度は大学院進学希望者が増えたのだが、オンライン授業のみの期間を体験し、学び足りない、もっと学びたいと思った学生がいることの現れではないか。一方で、意欲が低く心配される学生もいる。

・大学の授業は高度な内容を扱うべきと考え、学生の能力を低く見積もって授業レベルを下げるのではなく、高度な内容をわかりやすく説明することに努めた。

2．目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など
（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

（ア）配布資料について

・使用するレジュメは全て紙媒体で配布した。理由としては、パソコンを持参しない学生も多く、まとまった長さの原文の文章を読ませるのにスマートフォンや小さめのタブレットでは学習効果が上がらないと考えたからである。概ね好評だった。

・教科書のように一貫性のあるオリジナル資料を作成し、初回までに全資料をドライブにアップロードした。学生からは、一括して入手でき、全体の内容を把握しながら受講できたので便利だったという感想があった。

（イ）運営方法について

・オンライン授業では、その回の内容と目的に応じて、リアルタイム授業とオンデマンド授業（毎回課題を提示し解答を提出させる）を組み合わせた。

・授業内課題およびリアクションペーパーを、オンライン授業の時と同様に Google フォームを利用して提出させた。特に授業内課題はその場で即座に集計でき、回答結果のグラフを提示したり匿名のコメントを共有したりできたので、大変効果的であった。

・講義であっても授業内で学生が主体的に活動するように、クイズ形式の設問やグループディスカッションの場を設けた。ディスカッションやリアクションペーパーでの意見は受講生全体で共有し、双方向の授業を心がけた。

・リアクションペーパーに授業内容の不明な点や、授業中に自分で考えたことを書くように指示し、Google フォームで提出させ、翌週の授業冒頭でコメントしながら紹介した。特に留学生（受講生の 1 割ほど）のコメントは毎回興味深く、紹介することで日本人学生にもよい刺激を与えられた。

・オンライン授業で効果的だったので、対面授業でも 10 分間の小休憩を入れた。学生からは「後半も集中できたのでとてもよかった」という感想が寄せられた。

3．今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

・オンライン授業となってから始めた学科内ＦＤ研修を、対面授業に戻った今後も続ける。当学

科は以前から教育方法や学生指導について教員同士で話し合う組織的な習慣があり、それがより強化された。

4．学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

・対面授業では換気を徹底するために、教室のドアを開け放して授業を行ったが、隣の教室で行われている授業の声や、廊下を歩く学生の話し声などが響く時が多々あった。特に演習授業では、マスクを付けたまま発言するため、例年以上に学生の発言が聞き取りにくく難儀した。各教室へのマイク設置や、教室配置の工夫、（難しいかもしれないが）換気ができるシステムの導入などを検討していただければありがたい。

5．授業評価に関する感想、要望

・オンライン授業の授業時に、授業評価アンケートを実施したが、回収率がきわめて低かった。リアルタイムでくり返し呼びかけ、チャットにリンクを貼ったにもかかわらず、回答しない学生が過去２年間のオンライン授業に比べて多かった。学生側に「アンケート慣れ･飽き」があるのかもしれない。回答率を上げるには、対面授業の教室で回答時間を設けるのが最も確実だとあらためて思った。

史学科

１．授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

史学科教員の授業報告書では、授業の目標は「ある程度達成できた」ないしは「達成できた」のいずれかであり、授業の目標はおおむね達成できたとの認識である。

学生側の姿勢については、授業報告書自体に「授業に関する調査」の Q1、Q2 に関するコメントを求める欄がないため、意見をとりまとめることは難しい。もっとも、授業の目標がおおむね達成できたことから、学生の取り組みも、教員から見ればおおむね満足できるものであったといえる。ただし、学生の関心を引きにくいテーマの場合は様々な工夫にもかかわらず、出席率が思わしくなかったとの感想や、学生の習熟度に大きなばらつきがあり、全員が積極的に参加できるような制度や工夫が必要である、との意見もあった。後者については 4 において再度触る。

２．目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など
（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

Q2 の回答によれば、史学科の教員は総じて①パワーポイントの使用、②レジュメや史料、視聴覚教材といった独自教材の提供、③学内システムの活用、④課題を課すことを効果的としており、一部の教員は学生同士の共同作業（ディベート、グループワーク、グループディスカッション）も高く評価している。他方で、教科書の使用、小テスト、私語への注意や厳格な出欠確認を挙げた教員はいなかった。Q4 の回答では、（classroom による）リアクションペーパーによって学生の意見･理解度をモニタリングすること、比較的大人数の講義でも発言を求める機会を設けること、学生側の不満を積極的に解消する姿勢の重要性、図表の活用が挙げられている。

３．今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

今後、適正人数の院生を確保することが重要な課題である。

４．学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

・基礎課程演習における習熟度別のクラス編成と、一部のクラスにおけるテキスト読解、レポート執筆といった基礎トレーニングの導入。
・WIFI 環境の改善。
・例えば一年次センターにおいて、オンラインツールに関する基本的知識を一括して教導すること。
・一年生に対するアカデミックライティング訓練の充実。

５． 授業評価に関する感想、要望

・オンラインでの授業評価の継続を希望する。
・学生側の実感を把握するため、授業報告書の Q2 を授業アンケートの項目に入れてはどうか。

人間関係学科

１．授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

概ね、どの授業でも目標達成度は高いが、「社会統計学」に関しては課題が多い。本学科では社会調査士カリキュラムを導入しており、「社会統計学」はその必修科目であるが、もともと苦手意識の強い学生が多く、意欲や理解度に大きな差がある。

今回の授業報告にはないが、「社会統計学」のアドバンス科目である「データ分析の基礎」「多変量解析法」においても、その他の科目に比べると、理解度の高い学生と低い学生に二極化する傾向があり、後者の指導に苦労している。

２．目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など
（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

Classroom は多くの授業で活用されており、毎週の授業の資料配布や課題提出だけでなく、成績発表後の講評やアナウンスなども含めて、教員と受講生とのコミュニケーションや情報共有を促進している。

授業の中で、理論と紐づけて先輩の研究が紹介されたり、または先輩と直接交流したりする機会があると、モチベーションが向上する様子がうかがえる。年齢の近い先輩は、学業においても、キャリア形成においても、よきロールモデルとなる。

３．今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

今後、「社会統計学」を苦手とする学生が増加していくと予想されるが、能力別に 2 クラスに分けるといった運営体制の工夫も、将来の選択肢には含めている。また、「AI・データサイエンスの基礎」の全学必修化がどのように影響するか、注視していきたい。

現行では、2 年次の概論必修科目が多く、学生の時間割に自由度が少ない、1 科目を落とすと社会調査士資格取得にも支障が発生する、教室手配や時間割編成に難が多い、など問題が多い。そこで、2024 年度からカリキュラムを改訂し、2 年次の概論必修をスリム化した上で、社会調査士科目も基礎科目から応用科目の順で積み上げていけるように、時間割も整える予定である。

また、2024 年度からは大学院社会文化学専攻の新体制発足が承認され、人間関係研究領域として、学部からの連続体で指導体制を組むことが可能となった。専門性の追究に加えて、社会調査士の上位資格である専門社会調査士も積極的にアピールしていきたい。早期修了学生制度も導入できれば、大学院の充実とともに、学部生の意欲向上も期待される。

４．学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

（1）オンライン授業の継続

2023 年度からは全面的に対面に切り替わるが、オンラインの方が対面よりも教育効果の高い授業もある（大教室の講義科目など）。一概にオンライン授業を否定せず、教育効果の高い場合は今後も継続できるとよい。一方で、オンライン授業が認められる基準があいまいで、やや恣意的な判断も見られることから、明確な基準作りが必要であろう。

対面授業であっても、ICT を活用することで授業の質向上が期待される。そのためには、学生全員がデバイス（ＰＣ、タブレット、スマホなど）を持参すること、教室の環境（Ｗｉ-Ｆｉ、チャットアプリなど）の整備などが課題である。

（２）ＳＴ比の調整

本学科はＳＴ比が高く、1 ゼミあたり 10 人が平均となっている。できるだけ学生の希望に沿えるようにゼミの振り分けを調整しているが、希望が偏った場合には、10 人を超えるゼミが発生することは避けられない。人数が多い場合は、学生 1 人あたりが受けられる指導量が物理的に少なくなる上に、グループディスカッションなどにも支障がある。ＳＴ比も勘案して学科受け入れ定員の調整が行われるようになったが、今後も継続していただきたい。

（３）教学システムの機能向上と Google との住み分け・連携

Sophie の機能向上は全学的な課題である。どこに何の情報が掲載されているかがわかりにくい、特定の学生・教員にしか該当しない情報（教職など資格関係の連絡など）や優先順位の低い情報（講演会やイベント等の告知など）も五月雨式にメールで届くため、重要な情報がその中に紛れて見飛ばされるなど、教学システムとして使いにくい側面がある。学生側の不注意・怠慢の場合も多いが、1 年生の学科選抜に関わるような重要な情報が十分に周知徹底されていないことは、ヒューマンエラーを誘発しやすいシステム側の構造的要因でもあり、改善を望みたい。

また、教職員には、Sophie 学生向け画面やバーチャル 1 年次センターの Classroom の閲覧権限がないため、いつ、どのような形で、何の情報が学生に掲示されているかを確認することができない。学生からの問い合わせや相談に対して的確に対応できないことがあり、教務課や 1 年次センターに問い合わせるといった手間とタイムラグがたびたび発生している。各学科に学生画面確認用の ID・パスワードを発行する、バーチャル 1 年次センターの Classroom は閲覧権限のみ発行するなど、学科からも確認できる手段があれば、業務軽減やタイムラグ解消の一助となろう。

授業運営においては、Classroom がはるかに機能的であり、教員も学生も Classroom は積極的に活用しているが、その一方で、Classroom には原因不明のシステムエラーが発生することがあり、レポートの提出などは正規の教学システムである Sophie を介することが推奨される。Sophie と Classroom との住み分けや連携について教員に一任せず、全学的にガイドラインがあるとよい。

同時に、授業関係ではないが、さまざまな事務作業に Google ドライブ上でファイルが共有されることについても、再考をお願いしたい。すでに入力されている情報を、他の共同編集者が誤って削除したり、ファイル自体を置き換えてしまったりするエラーが散見される（たとえば、年間オープンキャンパスの模擬授業タイトル、1 年生の学科専攻選抜に関するアナウンスなど）。今のところ、大きな問題にはなっていないが、今後、成績評価等の重要な場面でエラーが発生する可能性がある。セルごとに編集権限を設定するか（スプレッドシートで当該セルをドラッグして右クリック→範囲を保護）、全員が同時に編集・閲覧する必要がない案件については、Google フォームで提出を求め、事務方の手元のみでスプレッドシートの形で情報を集約できればよいと思われる。

５．授業評価に関する感想、要望

- 授業評価の回収率を上げることが課題である。
- 教員の報告書も、ファイル提出ではなく、Google フォームを活用することを提案したい。
- 授業報告書、学科報告書が、どのように活用され、反映されているのか不明。提出だけで終わっているのならば、問題点の整理や文書作成の労が無駄である。各学科・教員からの提案や提言等を拾い上げて、新体制の全学評価委員会や、将来構想委員会、教務委員会等での検討をお願いしたい。

国際交流学科

1．授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

概ね問題なし。

2．目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など
（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

これは個別回答の中にたくさん事例があるのでそちらを参照いただきたい。

3．今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

特になし。

4．学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

オンライン授業の今後については賛否両論あるが、少なくともその活用（方策）を検討することが時代の趨勢として必須と思われる。

5．授業評価に関する感想、要望

毎年度のことだが、非常に参考になるコメント、提案が多数出てきているのに、それがしっかり周知、活用され、フィードバックされないようでは、もはやここに意見を書くのが労力の無駄ではないかという意見が多数ある。真剣に検討してほしい。

哲学科

１．授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

ほぼすべての授業で目標が達成できている。ただ、コロナ禍による影響もあってか、授業をとおして教員との関係性を築くことに困難を感じる学生が増えてきている、との指摘があった。また、演習の人数が多くなると、どうしても何も発言しない（できない）学生が出てきてしまい、毎回何度も発言する学生とバランスをとることに苦労した、との報告があった。

２．目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など
（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

オンライン授業を行う中で、ICT ツールの活用が普及し、対面授業でも有効利用できる機会が増えた。たとえば、ある授業では予習のために Google フォームで次週のテキストについてのコメントや疑問点を毎週提出させ、それらを Google クラスルームに授業前にアップし、全員に目を通すよう指導した。また別の演習では、同様の課題を授業後に提出させ、それをアップして他の受講者の意見を読ませることによって、復習を促すことを行うなどした。

３．今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

コロナ禍で、オンラインを中心とした授業を多く履修してきたことからか、教員との関係性を築くことに困難を感じている学生に対しては、教員の側からの積極的な働きかけ、特に個別面談の機会などを適宜設ける必要性があると思われる。演習授業で発言しない学生がなぜ発言しないのか（できないのか）についても、さらにきめ細かな対応が必要であろう。

また、ICT ツールなどの活用が今後ますます重要となる一方で、コピペによる剽窃や、AI 技術の進化（ChatGPT、DL 翻訳など）によって課題等の「省力化」が広がることにどのように対処するかが求められている。たんに不正防止だけにとどまらず、学生たちの自覚や誇りを高め、こうした技術も使いこなしたうえでより高度な知識や知的能力を獲得することができるよう導いていく必要があると思われる。

４．学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

近年著しくなった、学生の間の学力・能力の格差をどうするかが急務である、との意見があった。従来どおりの満足のいくレベルの入学者も少なくない一方で、明らかに基礎的な学力・能力が不足している学生や、心理的な困難を抱える学生が増加しており、いっそうの個別的対応が必要になってきていると思われる。具体的な対応策はなかなか難しいが、たとえば、授業外での「高校の補習的指導」「セルフラーニングによるフォローアッププログラム」などを用意する、基礎課程演習を差異化する（基礎技能の習熟を目指すコース、学問関心を追求するコースなど）といった方策が考えられる。

また、きめ細かな対応のためには、たとえば基礎課程演習の担当教員の所属研究室には年間を通して出入りできるようにし、副手を介して質問をすることを可能にしたり、研究室からアカデミックアドバイザーに繋いだり、学科の学生と話せる機会をつくったり、といった方策も考えら

れよう。

一般的な授業の形態に関しては、オンラインで蓄積された経験を踏まえ、たとえば 100 名を越える受講者がある講義などではオンラインで授業を行うことのメリットが明らかな場合もあり、原則対面とはしつつも、より柔軟な対応が望ましいのではないか、という意見があった。

５．授業評価に関する感想、要望

哲学科では、これまで通年で展開されていた演習や全学共通科目のキリスト教学が来年度からすべて半期化されるため、授業評価をどの段階で行うべきか考えておく必要がある。通年科目だった科目は多くの場合、前期・後期を連続して受講するよう推奨することになるが、その場合、後期末に後期分だけの授業調査をすることになるのか、前期との関連をもたせたい場合、アンケートの質問の文言を含め柔軟な対応が可能かどうか、事前の確認と検討が必要になると思われる。

教育学科

1. 授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

ウイルス感染が完全収束しない状況にあっても、多くの学生が熱心に授業に参加している。授業目標達成以上に、教員が一人一人の学生の学びの充実に心を砕いていたことが大変印象的である。授業目標そのものは、教員の授業への種々の工夫によって、ほぼ達成できているといえようが、学科、大学のさらなる包容力ある教育が機能するよう今後も望みたい。

2．目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など
（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

1 パワーポイント（8）　2 レジュメなどの配付資料（5）　3 文献などの資料･史料（7）
4 教科書・問題集などの教材（7）　5 視聴覚教材（9）　6 プレゼンテーション（6）
7 ロールプレイング （2）　8 グループディスカッション（8）　9 ディベート（0）　10 グループワーク（8）　11 ゲストスピーカーの招聘（6）　12 ICT ツールの活用（5）　13 学内システム（Sophie、Google ドライブ等）（10）
14 教室（座席の変更ができる教室・演習室など）（6）　15 予復習の課題（5）
16 授業内での課題（9）　17 私語への注意、対応（1）　18 小テスト（0）
19 厳格な出欠席（3）　20 授業の時間帯（1）　21 シラバスの工夫（1）
22 その他（2）（正問のない問を授業の基軸に据えること ）　（体験訪問）
23 特になし（0）

全教員が、アクティブラーニングを基本としている。例えば、オンライン授業によって希薄な人間関係となりがちであることから、グループディスカッション等のグループワークを通して、人間関係の構築に務めたりするなどの工夫や、予習課題として資料を読みこなし、事前に「感じたこと、考えたこと」などをワークシートに記しておくなどして、討議の時間を十分に確保することができた。

Google ドライブを通じて、授業資料を、毎回、必ず授業前日までにアップロードすることで「事前に目を通して授業に参加することができた」という学生の肯定的な声を挙げ、授業前の資料配信が学生の主体的な参加を促す一助となるということもあった。

ゲストスピーカーの招聘は、オンライン上であっても学生の経験値が豊かになるとの指摘があり、さらに充実した招聘者、時間数の確保が必要である。また、深い人間理解や幅広い教養を持ち合わせた教育者の養成という観点からも、多様な背景を持ったスピーカーの登壇が望まれるところである。

３．今後、学科・専攻コースとして取り組むべき課題

教育学科の課題として、特に教育実習を視座に「実習校とのコミュニケーション」や「コロナ状況に応じた対応」の問題、「卒論指導と教育実習との期間重複」等のいくつかの課題がある。その他、以下に、今回の報告書に提出された代表的な課題内容を示す。

・教員養成課程における ICT 環境等については、大学として計画的に改善する必要があり、その改善効果がとても大きいと感じた。

・既有知識とスキルという点で授業開始時点から受講生間に差があることを避けられない授業の場合、現在のように「少人数」「複数クラス開講」「授業補助者付き」を継続することが必要になる。可能であれば高度な音楽学習歴をもつ受講生が、将来的に音楽専科教員を希望することも可能になるような、より高度な学習内容に対応した授業の開講も望まれる（現状の開講科目数が多く実現困難であることは承知しているものの）。

・オンラインでの経験を対面に生かす工夫の共有が必要かと思う。

４．学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見、提言など）

個々の教員から提出された意見を挙げる。

アンケートの自由記述欄に、以下のような記述があった。どちらも初年次生からの回答と思われる。

・「度々ある、グループワークがとても良いと思います。わたしがとっている授業では基礎課程〔演習〕以外でグループワークのある授業はこの授業だけでした。先輩方と意見交換できるのは、とても有意義な時間で、自分では気づかないような新しい考え方にたくさん出会うことができました」

・「対面授業でグループワークが多く、先輩方や実際に実習に行った方にもお話をお聞きすることができ、とても今後の学科選択へ役に立ちました」

⇒この二つのコメントを踏まえつつ、初年次生の受ける授業を全体として見ると、もしかしたら初年次生には、基礎課程演習以外、学生同士（先輩―後輩間を含む）の交流を促進する機会（グループワーク等）が少ないのではないか。グループワーク等は、同じ授業を受講する同年齢および異年齢の学生同士の貴重な交流の機会となり、学問的な刺激はもちろん、後輩学生が先輩学生から学生生活上のアドバイスをもらえるチャンスともなっていると考えられる（事実、上記のアンケート結果には、先輩学生から後輩学生（初年次生）へ、学科選択のアドバイスや、教育実習で経験した内容の世代間継承が行われた形跡が見られる）。今後は、大学全体として、初年次生向けの授業のあり方を再考してみても良いのではないだろうか。

・コロナ禍にあり、学科および全学で学生の学習の質の向上のための取り組みを一生懸命に展開している。今後も引き続きこのような努力を全学的にサポートしていただく体制がありますこと

を願います。

・少ない回数で多くの内容を学習しなければならない授業なので、前時の学習は次の時間には定着していることが前提であるということを、学生自身が受講の心構えとして持っていてほしかった。全学的に、授業時間外の学習の習慣を持つべきという方向性で学生をエンカレッジし続ける必要性を感じる。

５．授業評価に関する感想、要望

授業評価が実質的な大学の教育力向上に結びついているのかどうか、その状況が見えないという意見は従来からあったが、肯定的な捉えも多いことも事実である。以下に代表的な意見をランダムに記す。

・自由記述欄など、丁寧に学生からのフィードバックがあり、大変参考になった。

・「『授業に関する調査』結果」の資料を全学的に電子データとして配布する（現況は印刷し紙の資料を配布）と、配布側も受け取り側も業務負担が少なくなるかなとは思います。

心理学科

１．授業の目標達成度や学生の取り組みに関する学科・専攻としての所見

心理学科では，基礎課程の 1 年次生に対し，平成 21（2009）年度より毎年「心理学入門」を開講し，学科の全専任教員によるオムニバス形式の講義を展開している。高等学校で心理学を学ぶ機会はないため，1 年次生は全て，心理学の初学者となる。こういった受講生に対し，心理学の学問領域の魅力を伝える努力を継続してきた。例年，300 名前後の受講生を集めており，本年度も 284 名が受講した。導入教育として一定の成果を上げ続けていると考えられる。

一方，2 年次以降の専攻課程では，まず 2 年次前期に「心理学実験」,「基礎情報処理技法」,「心理学統計法Ｉ」を必修科目として設置し，科学的な思考能力（心の科学リタラシー），パソコン技能および統計学の基礎の習得を目指している。このうち,「心理学実験」では半期の間に 6 種類の実験およびそのレポートを課すことにより，科学論文の書き方（テクニカル・ライティング）の基礎的能力の習得に努めている（意欲のある学生には，学力をさらに向上させる機会として，2 年次後期以降に「心理学観察・調査実習」などの選択科目を設置している)。このほか，学科の必修科目には講義形式の「心理学概論」(2 年次前期),「臨床心理学概論」(2 年次後期)，さらには 3 年次・4 年次の演習（各教員によるゼミ）があり，積み上げ方式で履修するルールを設けている。これらと並行して，認知・発達・臨床の各領域の特講や，各種のトピックスや方法論に関する講義・演習を選択科目として開講している。これらにより，心理学科へ進学した者が徐々に専門性を深めていき，4 年次に滞りなく卒業論文を執筆・提出できるようになるカリキュラム構成となっている。例年，卒業を予定している 4 年次生のほぼ全員が卒業論文を提出しており，提出した学生の全員が合格水準に達していることから，一連のカリキュラムが有機的に機能し，専門教育として成果を上げていることが窺われる。

２．目的達成や学生の積極性向上に資する具体的な授業の実践例など
（他の教員にもヒントになるような工夫や方法がありましたらお書きください）

オンラインか対面かを問わず，一方向的に話すだけの講義では退屈に感じる学生も多いので，学生の積極的な参加を促すことが必要と考えられる。リアルタイムでのオンライン授業などでは，例えば Google meet の機能を活用し，チャットで簡単なクイズを出題し回答させる，あるいはアンケートへの回答を求めるなどの工夫が可能である。また，オンデマンド型のオンライン授業では，クラス全体の課題への反応を翌授業でフィードバックする，あるいは，別途リアルタイムで教員が回答する機会を設けることで,「他の受講生の考えなども聞けて良かった」,「自分の書いた回答に，先生がコメントしてくれて参考になった」などの肯定的な反応も見られた。対面の授業では，例えば Slido の機能を用いアンケートへの回答を匿名で求め，即座にクラス全体の傾向を呈示し，授業に対する受講生の興味を維持できる。教員と受講生の間でこのような双方向性のやりとりを設けることで，受講生による授業への積極的な参加を促せると考えられる。

３．今後，学科・専攻コースとして取り組むべき課題

現行の体制で，導入教育・専門教育が有機的に機能しており，意欲のある 1 年次生が本学科を

選び，進学後に学科のカリキュラムに熱心に取り組む状況が続いているので，水準を落とすことなく，これを維持し，発展させていく努力が必要である。

なお，学科所属の在学生に関しては，本学科で一定数の必要科目を履修して卒業した後，本学の大学院に進学することにより，公認心理師の国家資格取得へとつながる体制が整っている。これに伴い,「心理学とは臨床心理学のことである」と心理学を大変狭くとらえている学生が心理学科への進学を希望している現状が見て取れた。心理学科では臨床心理学だけでなく，認知心理学と発達心理学という基礎心理学も学ぶことができる。これらをバランスよく学ぶ魅力を発信していくことが学科の課題と言える。

４．学科・専攻コースの立場として大学に望むこと（意見，提言など）

ここ数年，学生とのメールでの連絡が困難となったように感じられる。教員からのメールに対する学生からの返信が遅いこと（あるいは返信がないこと）に対し，学生に理由をただすと，大学からの連絡が多く，教員からの連絡を見逃すことが多いようだ。Gmail の管理の方法などについて，学生が早い段階で把握できるような指導を，大学として実施いただきたい。

また，こちらは毎度のことであるが，教室・ホール設備（音響・映像・空調）を計画的に更新していくことが望まれる。劣悪な設備の使用を続けることは，在学生・教員の双方に深刻な負担をもたらすだけでなく，オープンキャンパスの模擬授業やホール利用のイベントなどで大学の恥を晒すことにもなりかねない。他大学の設備導入の動向を注視し，遅れをとらないよう積極的な設備投資をお願いしたい。

５．授業評価に関する感想，要望

授業評価に基づく授業報告書において,「大学に望むこと」として各学科・教員から寄せられた意見・提言について，実行力を伴った検討組織が必要かと思われる。

第 4 章　聖心女子大学グッドティーチャー賞の推薦

「聖心女子大学グッドティーチャー賞に関する内規」に基づき、グッドティーチャー賞を推薦することになっているが、2021 年度から授業評価方法がオンライン形式に変更になり、評価の実施授業数や学生の回答数がまだ十分に戻らないことなどから、2021 年度に引き続き、本年度もグッドティーチャー賞の推薦を休止することとした。

参考資料

2022年度 授業報告書

本報告は本年度のご自身の授業を振り返っていただくと同時に、個々の先生方のご経験やご意見を、全学的に役立てるための資料として使わせていただきたいと思っています。学生の授業評価の集計結果とともに、整理して掲載させていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

所属学科・専攻　　氏名（職名）

授業科目名　　履修登録学生　　名

授業形式　1 ゼミ・演習 □　2 講義 □　3 その他 □（　　）

開講時期　1 前期 □　2 後期 □　3 通年 □　4 集中 □

Q1. 本授業では目標をどの程度達成できたと思いますか。

1 達成できた □　2 ある程度達成できた □　3 あまり達成できなかった □　4 達成できなかった □

Q2. 目標を達成する上で効果的だった方法や工夫はどのようなものですか。（複数回答可）

1 パワーポイント □　2 レジュメなどの配付資料 □　3 文献などの資料・史料 □

4 教科書・問題集などの教材 □　5 視聴覚教材 □　6 プレゼンテーション □　7 ロールプレイング □

8 グループディスカッション □　9 ディベート □　10 グループワーク □　11 ゲストスピーカーの招聘 □

12 ICT ツールの活用 □　13 学内システム（Sophie、Google ドライブ等）□

14 教室（座席の変更ができる教室・演習室など）□　15 予復習の課題 □　16 授業内での課題 □

17 私語への注意、対応 □　18 小テスト □　19 厳格な出欠席 □　20 授業の時間帯 □

21 シラバスの工夫 □　22 その他 □（　　）　23 特になし □

Q3. 教室設備（空調・ICT 機器・マイクなど）や通信環境に問題はありましたか。

1 教室 □　教室番号＿＿＿＿＿　2 オンライン □

1 特に問題はなかった □　2 問題があった □（　　）

Q4. 授業内容、運用、カリキュラム編成などについて、特にご意見、ご提言がありましたら自由に記述してください。

① 教員個人が取り組むべきこと、効果的な授業方法、運営の仕方について（ご自身のことでなくても結構です）

② 学生の積極的な取り組みを促すために効果的だと思われる授業方法や工夫について

③ 学科や大学全体として取り組むべきこと

④ アンケート結果（結果について・学生のコメントなど）

⑤ 授業評価についての意見、提言など

⑥ その他

2023 年 8 月 31 日

聖心女子大学